飯田女子短期大学紀要 第36集，11-66，2019

ニーチェの自然科学論の言象学的解明

清　水　茂　雄

Die Logo-phenomenologische Erläuterung zum Naturwissenschaftlichen Gedanke Nietzsches

Shigeo Shimizu

Zusammenfassung: In dieser Abhandlung wird der naturwissenschaftliche Gedanke Nietzsches erörtert.

Das Element der Philosophie Nietzsches wird zuerst von dem Standpunkt der logo-phenomenologischen Grammatik aus gezeigt, um den naturwissenschaftlichen Gedanke Nietzsches zu erörtern. Das Wesen des naturwissenschaftlichen Gedankens Nietzsches wird auf dem Element klargemacht. Das Element der Philosophie Nietzsches ist nach der logo-phenomenologischen Grammatik ein logo-phenomenologisches Gebiet, wo das Wort selbst aus der Subjekt-Prädikat Beziehung herauskommen will.

Die Bewegung entsteht innerhalb dem Substantiv in der logo-phenomenologischen Grammatik. Die Bewegung ist wesentlich die Deklination des Substantivs in der logo-phenomenologischen Grammatik. Diese Bewegung, gesehen aus dem Element der Philosophie Nietzsches, wird für ein Quantum <Wille zur Macht> genommen.

Dieses Quantum <Wille zur Macht> ist die Wellenfunktion in der Quantentheorie.

Key words：Nietzsche（ニーチェ），Naturwissenschaft（自然科学），Quantentheorie（量子論），die logo-phenomenologische Grammatik（言象学的文法論）

序　　論

本論文は，『言象学的文法論における動詞とト・アウト<τὸ αὐτό>』と題する論文[1)]の注の11に，「また，*名詞*は*動詞*との関係を語るようになると，『有りそう』となる．つまり，『動く』ことは，『主語が有りそう』ということと同一である．量子力学はこれを数学的に表現している」と語られていることを受けて，言象学的文法論的意味での*名詞*について詳細に解き明かすためのいわばベースキャンプのようなものを設営しようという試みである．

*名詞*の言象学という呼吸もできないくらい厳しい山頂へ登るためのこのようなベースキャンプの設営は，具体的には，ニーチェの自然科学論，というより自然科学批判の中に潜在している言象学的文法論的内実を取り出し，その内実の明かりを頼りにして，自然科学の本質，特に量子論，に迫ることによって遂行される．

最初に，この序論において，ニーチェ哲学のエレメント（基盤となる思索的境位）の言象学的文法論的位置付けとそこから導かれるその自然科学論の本質的性格とその歴史的意義を示したい（この序論の最後に，下線を施

2019年2月7日受付；2019年3月19日受理

した文にこのことが集約されている）．

「言象学的文法論」とはどのようなものかについては，この題名の既刊論文ならびにその後公表された諸論文を見てもらいたい[2]．冒頭に挙げた論文の§1に「言象学的文法論」についての簡潔な要約が載せられているので，手っ取り早く知りたい人は，そこを見て欲しい．ここでは，その論文の注の11を受けて本論文の考察がなされるということなので，改めて「言象学的文法論」の内容を反復せず，その論文の論述内容を前提として考察を進めていく．なお，以下において，言象学的文法論における文法事項は，他の論文と同様，斜体表記にする．たとえば，*動詞*と斜体表記されたものは，「言象学的文法に属する文法事項としての動詞」を意味する（したがって，斜体表記された語句の前に「言象学的文法に属する」が付いているものと理解して欲しい）．

さて，ニーチェ哲学のエレメントとはどのようなものか，つまり，ニーチェの哲学はどのような思索的境位において成立しているのかという問いに対して，言象学的文法論的に以下のような答えが提示される．

言象学的文法論における中間的・過渡的*文法*事項としての*Werden*（Werden）は，言象領域（言葉が言葉の言<コト>がらを言う領域）から論理領域（主語-述語関係が成立している領域）へ，逆に論理領域から言象領域へという過渡的*文法*状態を意味する（ドイツ語では，werdenは「成る」という意味）．*Werden*（Werden）という*文法*事項は，*助動詞*の<*Sagen*>*werden*が*不定詞*<*Sagen*>（sagenはドイツ語では「言う」をsagen werdenは，sagenの未来形を意味する）を見失うことで言象する．この「見失い」によって，言象性は後退し，代わって，論理的なもの（主語-述語関係）が現れてくる．この過渡的*文法*状態が*Werden*（Werden）である．*Werden*（Werden）の括弧内のWerdenが斜体ではないのは，言象性の後退の結果，*助動詞*はいわば「無」となってしまい，*動詞*が言象してくることを表している．*動詞*も*文法*性を失うために，*動詞*とは言われなくなる．このようになった*動詞*が「有る」という動詞である．「無」と「有る」の中間は，ヘーゲル『論理学』が示すように，「成」ないしは「生成」（das Werden）であり，それの本当の姿は，つまり，*文法*論的内実は，*Werden*（Werden）なのである．「有る」は，本来，*動詞*であり，「無」は，本来，*助動詞*なのである．言象学的文法論的に見るなら，*動詞*と*助動詞*の「間」が*Werden*（Werden）であるが，このことが論理領域側からは，「有る」と「無」の「間」として見られ，「生成」または「成」と見なされるのである．

「有る」という動詞は，このように，本来，*動詞*であるけれども，*動詞*であるとは言われない．なぜなら，「有る」ということが*動詞*であると言われるには，言象学的文法論の視界が開かれていなくてはならないからである．しかし，*動詞*が言象したときには，言象性が後退して言象領域は「無」となるのであるから，「有る」が*動詞*であると見るための視界は完全に閉ざされるのである．そのような意味で，「有る」の本質規定は「無」規定となっていると言える．ヘーゲルの『論理学』はここから始まるのである．

しかし，「有る」の本質が「無」であると思惟されるには，上のような理由があることになる．この「理由」を明かそうとすることは，言象的方向へと思索（Denken）が歩むことでなければならない．論理領域には知られていない或る原理が，「有る」の「無」規定性の理由と意味を問うのである．「無」に向かって問うことは，「有る」の本質とは何かを問うことである．このような根本的ことわりに沿って思索した哲学がハイデガーの哲学である．彼の哲学は，本質的には，「有る（Sein）」の意味（Sinn von Sein）を問う哲学なので

ある．

上で示された理由から,「有る」の意味を「問う」には，論理領域側の問い方では原理的に不可能である．つまり，*Werden*（Werden）が顕現できるように，言象性が働き出すように，というようにならなければならない．このような方法論は，ハイデガーの場合,「解釈学的」と言われたのである．つまり,「有る」よりも先行的な,「有る」とは別の視座から「有る」を照らし出すという方法を取らざるを得ない．この先行的視座は，*動詞*（*Zeit-wort*）の方にあり，したがって，本質的に「時（Zeit）」的であるのでなければならない．周知のように，ハイデガーの主著『有と時（Sein und Zeit）』に存する方法論的なZirkel（循環）の問題性はここに根付いているのである．

ところで,「有る」という動詞は，元々は，*動詞*であるが，それは，その*文法*性を忘却しているので，今は,「無」となっている（*動詞*は「有る」に対して「無」となる）．つまり，*動詞*の「無」は,「無」ではないとして否定されるべき「無」ということになる．このような意味での「無」を「無」化する働きは,「有る」とは*動詞*であると言う方向に向かい始めることではあるが，ハイデガーのように「問う（ハイデガーの場合，源へと尋ねる）」というようなことではまだない.「有る」ということそのことが全体として否定されるのである．なぜなら,「有る」の本質である「無」に対して，否定的になることは,「有る」ということそのものが「有る」的ではなく，その本質へ向かい，無的となることを意味するからである．このような意味での否定する働きも，裏から見るならば，言象性が働き始めたことではある.「有る」の本質である「無」が否定されていく（「無」ではなく，実は*動詞*であると言われるようになろうとしている），ここが，ニーチェ哲学のエレメントなのである.「有る」の本質を探して思索が「無」の中へとこのような否定によって入って行くと，そこは，上記のように,「生成（Werden）」と言われることになり,「有る」の本質としての「無」が否定されることと一体であることになる．つまり，このような「生成」は或る肯定的なものとなる．

しかし，ここに現れてきた「生成」は，*Werden*（Werden）と同じものではない．なぜなら，後者は*文法*的なことがらであるのに対して，前者は，まだ言象とはなっていないからである．しかし，ここに現れてきた「生成」は，少なくとも,「有る」という動詞の*文法*由来性への「開門」というような意味をもつものでなければならない．*動詞*がその*文法*由来性を見失っていることが,「有る」という動詞の根底になっている．その「底」は,「無」となっているのである．このような「無」に対して,「無」ではないと，否定を「する」のは，*動詞*の働き，ないしは，言象の方の働きでなければならない．論理領域からこのような否定の働きが生ずるはずはないのである．このような否定の働きは，したがって,「有る」という動詞の底を成している「無」の奥の方から遂行されるものということになる（非常に深い意味でのニヒリズム）．一般に,「する」ということの根底，それの定義は，*動詞*である．ゆえに,「有る」という動詞の底から否定の働きを「する」ものは,「する」の定義ないしは奥義である「*動詞*」なのである．*動詞*は「*動詞*・する」[3]．「*動詞*・する」とは，*動詞*がその*文法*的機能を為すことである.「有る」という動詞の底を成していた「無」を否定する働きは,「*動詞*・する」に拠る，つまり,「*動詞*・する」がしていることなのである．

ゆえに，ここに現れてきた「生成」は,「する」の定義である「*動詞*・する」の支配下にある．ここには，或るMacht（力・支配力）が働いているのでなければならない．否定を「する」ことには一つの「意志（Wille）」，*動詞*が自身を言おうという意志が存している．かくし

て，ここに現れてきた「生成」は「力への意志（der Wille zur Macht）」と言われるべきである．周知のように，この「力への意志」が，ニーチェ哲学の根本語である．*動詞*の奥には*Werden*（Werden）が言われているという面からすれば，ここで言う「生成」とは，この*Werden*（Werden）に向けての準備ないしは開門というような意味でのWerdenなのである．このことは，『生成について』という論文でも考察されたことである[4]．かくして，ニーチェは，次のような言葉を語るのである．

「<有る>の最内奥の本質が力への意志である場合（Wenn das innerste Wesen des Seins Wille zur Macht ist），」[5]

このニーチェの言葉は，次のことを表している．「有る」という動詞の最内奥に存するそれの本質である「*動詞*・する」が，「有る」の根底を成す「無」を否定することとして働く場合，すなわち，「力への意志」となっている場合には，ということ．「無」を「無」化し，それを「否定する」この*動詞*の働きは，ハイデガー的な「問い尋ねる」という働きとは区別されるべきである．後者はすでに言象性へ向けて道を歩んでいる．すなわち，「言葉への途上」性に気付いている．これに対して，前者は，言象的なものを背にしているのである．ハイデガーの哲学は，歴史的に，ニーチェの哲学の「後」に続いて現れたのであり，この順番には必然性がある．また，ハイデガーは，ニーチェ哲学の本質を照らし出すことができる唯一の視界の開かれとなっているはずであり，このことも，上のような構造によるのである．

さて，ニーチェの哲学のエレメントが，上のように，「有る」という動詞が*動詞*であることを言い始めるようになるべく「否定」する境位であり，したがって，歴史的な「否定」をする境位であるとすれば，「有る」という動詞がまだ動詞のままである境位から，言葉そのものが，はじめて，脱出する門の開かれに気づくことになる．「有る」という動詞が動詞のままである境位とは，すでに示された論理領域と名付けられていることであり，そこでは，言葉は言葉自身を言うことができなくなり，「主語-述語」関係で語る．この関係の中において，言葉が自身を言おうとすることは，論理的な否定性として（ヘーゲルのBegriff）把握される．これに対して，歴史的否定は，この論理的否定を超えて「否定」することなのである．すなわち，「*動詞*・する」がし始めることである．

したがって，もし，ニーチェの哲学のエレメントが，歴史的な「否定」をする境位であるとするならば，彼の哲学の中で，言葉は，「主語-述語」関係から脱出する態勢にあるのでなければならない．ここから帰結されることは，ニーチェの哲学の中で，「述語」に対する根本的批判がされなければならず，その批判の中に，言葉そのものの「脱出」の様子が語り出されているはずであるということである．

この点について，以下，ニーチェの『力への意志』531の内容[6]を検討して，確認をすることとする．

「判断することは，我々のもっとも古い信仰，つまり，もっとも慣れ親しんでいる，真と見なすことないしは非真とみなすこと<Für-Wahr-oder Für Unwahr-halten>である．」

判断，つまり，言象学的文法論的には，言葉が言葉を言おうとすること，つまり，まだ言葉が言葉として言う前にあって，自身へと戻ろうとしている事態，言葉が何かの対象に拘束されている事態，は，まだ，言葉そのものの「虚-言」性（言葉そのものが言うところは，すでに述べたように「無」の圏域であり，したがって，「無」が語られる，すなわち，「虚-言」的である）に対抗しているために，真理にいわば住み慣れている．「信仰」とは，

ニーチェによれば,「真と見なすこと」である．本来は，虚-言性を言おうとしていることであるのに，そのことが，真理と見なされている．これが,「判断」である．ゆえに,「判断」はもっとも慣れ親しんだ,「真と見なすこと」である．ニーチェがこのように「判断」を捉えたということは，ニーチェの哲学のエレメントがどのようなものかを端的に表現していることが分かるのである．

「何があらゆる判断の中で真として信じられているのか.」

判断においては，言葉が言葉自身に戻ろうとしているのであり，したがって，このことが「真」と見なされていることである. しかし，この言葉の動向は,「虚-言」を語ろうという動向である．ところが，ニーチェの哲学的立場においては,「虚-言」を語ろうとしているのは，言葉であるとは認識されておらず，上で示されたように,「力への意志」として知られているのであるから，あらゆる判断の中で真と見なされているものは,「力への意志」ということになるのである．

次にニーチェは，根本的な問いを提起し，これに解答を与えようとする．

「述語とは何か．我々は我々の側での変化をそのようなものとして受け取っていない．そうではなく，我々には疎遠な一つの『それ自体』として受け取り，これを単に『知覚する』．つまり，我々はその変化を或る出来事として定立するのではなく,『有る』として,『特性』として定立するのである．そして，一つの本質存在を作り上げ入れ込む．この本質存在に変化が付属しているとみなす．つまり，我々は働きを働くものとして措定し，働くものを有るものとして措定しているのである.」

我々は，ある変化を何かの変化，何か「それ自体」の或る特性として変化を受け取る．したがって，変化の背後に変化の主体となる何かを前提するのである．つまり，一つの本質存在を造り出して入れ込むのである．いわゆる「実体」概念である．何かが働いているのだという見方において,「何か」という主体，原因が入れ込まれている．

「しかし，こうした形式化においてもさらに働きという概念は恣意的である. なぜなら，我々に現れるかの変化，それについて，我々はそれ自身原因であるのではないと，きまって信じているところのかの変化について我々はこう推理する．すなわち，その変化は働きでなければならない，と．つまり，次の推理にしたがうのである.『どの変化にも張本人が属している』．だが，この推理はすでに神話なのである．その推理は，働くものと働くこととを分けている.」

つまり，何かの出来事を働きと見ること自体が恣意的ということになる．働きと見ることは，すでに，働くものと働きとを分離させているのである．

このニーチェの議論の下にあるものは，あきらかに，生成ということである（議論の最初に「変化」を持ち出していることがその証拠になる）．言象学的文法論的に，言葉が言葉へと戻る一つの動向がこのニーチェの議論の根底になっていることが分かる．この言葉の動向は,「*動詞*・する」のいわば「働くこと」であり，したがって，生成は，何かが働いていることと理解されるのである．働いている者は，*動詞*であり，その働きそのものは，同じ*動詞*，つまり,「*動詞*・する」である．ゆえに，生成が，まだ，言葉の動向とは認識されていない場合，働く者と働きの分離が必然的に起こる．ニーチェは，このことを恣意的と見ているのである．そして，このような分離が「主語-述語関係」の本質であると見ている．事実，このような事態こそ，言象学的文法論的に見るなら，言葉が「主語-述語」関係に居ることに他ならないのである．ニーチェの立場は，まだ，言葉のことがらとしてニーチェが見ていることが理解されていない

立場であるゆえに，そのことが，「虚-言」へ向かうことであるのではなく，まさに，根本虚構として明かされるのである．つまり，ニーチェ哲学そのものが「*動詞*・する」の最初の働き始めを自身のエレメントにしているのである．ここでのニーチェの議論は，そもそも「主語-述語」関係が，深い意味での生成に本質的に関係していること，すなわち，言象学的文法論的には，*Werden*（Werden）に深く関係していることを証明するものになっている．かくして，「有る」という動詞の奥に潜む*動詞*が*動詞*としてはじめて働き始めることが，ニーチェ哲学のエレメントであることは，明白である．

ところで，上記の引用文の中で，ニーチェは，「述語とは何か」と問うのではあるが，それを直接には答えていないように見える．しかし，彼は上の議論の中で，「述語とは何か」について，それをもっとも根源的に答えているのである．なぜなら，言葉は，上の議論において，「主語-述語」関係から脱出する態勢になり，このことを「述語」とは何かとして語り始めているからである．言葉そのものが，「述語」の本質を語り始めている，これが，ニーチェ哲学のエレメントであり，ここで，言葉が言い始めているということがニーチェの上の議論となるのである．

「私が，稲妻が光る，と言うならば，その光ることを一方では活動として，他方では主語（主体）として措定している．すなわち，その出来事に対して「有る」こと<Sein>を前提している．この「有る」は，その出来事と一ではなく，むしろ，留まるのであり，有る<ist>のであり，「生成する」<wird>のではない．出来事を働くこととして見積もること，そして，働きを「有る」として見積もること，これは二重の誤謬ないしは解釈であり，それについては我々が責められるのである．」

本来「生成」であるものを「有る」と見立てていることが誤りであると見るのは，「生成」の方が「真」であるとニーチェが見ているからであるから，ここに，どうして「生成」の方が真であるのかという問いが生ずる．しかし，上で示したように，「生成」が真実ということではないのであり，「生成」は，言葉の上述のような動向として「虚-言」を語ろうとしていることなのである．「力への意志」は真理そのものであると見るならば，それはニーチェ哲学に対する誤解である．そうではなく，その哲学そのものが，「述語とは何か」への解答自身なのである．

さて，言葉そのものが「述語」とは何かという問いに対して，その答えを言い始めている，このようなことがらが，ニーチェ哲学のエレメントである．ここで，「言い始めている」ということは，どのような事態になるのかを理解することが肝要である．

「言い始める」とは，それ以前の有り方を否定するということを意味する．しかし，ここでの「否定」は，すでに，語られたように，「主語-述語関係」内での否定とは区別されなければならない．その関係そのものを「否定」するような「否定」は，「主語-述語関係」では語ることができないようなことでなければならないとともに，その関係からの脱出を行うということである．ニーチェは，このような事態を「対抗運動<Gegenbewegung>」と表している．

「力への意志．あらゆる価値の評価変更の試み- この形式によって原理と課題に関して或る対抗運動が表現されている．」[7)]

ニーチェ哲学は，本質的にこのような「対抗運動」である．これは，或る種の否定であるが，「主語-述語関係」的ではなく，したがって，上の議論に依るならば，「有る<ist>」を定立することの無い，「生成<wird>」の事態である．そして，これが「力への意志」なのである．本来，このような「対抗運動」をしているのは，言葉そのもの，ここでは*動詞*であるが，ようやく，「主語-述語関係」から脱

出してきた言葉そのものは，「言葉そのものが言い始めている」と語ることがまだできないのである（脱出している最中であるために，「主語-述語関係」の方にまだ繋がりをもっている）．この「まだ」は，歴史的に「まだできない」という意味であり，したがって，「対抗運動」も本質的に歴史的なことがらでなければならない．この「対抗運動」は，歴史を二分するような特別の事態なのである．こうして，ニーチェは次のように語ることができるのである．

「私はときどき私の手をじっと見ることがある．自分が人類の運命をこの手に握っているのだと思って．私は人類の運命を人知れず二つに割る．私以前と，私以降に．」[8)]

ニーチェ哲学の根本的境位が，言葉が「主語-述語関係」から脱出している事態，同じことではあるが，*動詞*が「*動詞*・する」ことを「し始める」事態であることがここに明瞭に示されている．

上で示されたように，このような事態は「主語」として，また，「述語」として言い表すことは原理的にできない．「主語」化と「述語」化にどこまでも「対抗」する或る「運動」として，語られなければならないのである．

さて，上のように，「力への意志」とは，「述語とは何か」という根本的問いに対して，歴史的に答えるものである．「主語-述語関係」から脱出しつつある言葉が「言い始める」ことである．ここがニーチェ哲学のエレメントなのである．

ニーチェの哲学のエレメントにおいて，「主語-述語関係」から言葉そのものが脱出し始めている，したがって，その境位は，まだ，「主語-述語関係」と関わっている．つまり，この境位では，まだ，言葉が「（言葉として）言う」というようになっているのではなく，それゆえ，言象が起きているのではなく，まだ或る事象性をもつ言象的なことが思惟されているのである．思惟する主体がことがらを見ながら，言葉を語るというような構造がまだ維持されている．「言葉を」とは，「言葉が」ではまだないことを意味する．このような事態が「脱出しつつある（以下、「脱出しようとしている」あるいは「し始めている」とも表される）」ということである．しかし，このようになってようやく「述語とは何か」という問いに歴史的に答えることが可能になるのである．

さて，以上のように，ニーチェ哲学のエレメントは，言葉そのものが「主語-述語関係」から脱出しつつある状態であるから，一方で，「主語-述語関係」とまだ関わりをもち，したがって，思惟的であるが，他方で，すでにそこには「*動詞*・する」の働きが働き始めている．「有る」という動詞が*動詞*であることは，論理領域，つまり，「主語-述語関係」においてはまったく知られていない．しかし，「主語-述語関係」から言葉が脱出し始めたところでは，「有る」という動詞がもともとは*動詞*であるということを言うことができる門が開かれるのである．*動詞*であると言うには，言象学的文法論が可能となっていなければならず，このことは，言葉が言うようになることを意味するのである．何ものかが思惟して，それを「言葉で」言うということとは根本的に異なることが起きるのでなければならない．こうして，「有る」という動詞の最内奥の本質（*動詞*）が語り出されるようになり，その中に「*動詞*・する」がそれに固有な「する」をし始める．歴史的な否定すること，ニヒリズム，すなわち，「対抗運動」が起こるのである．そして，このことは，まさに，「人類の運命を二つに割ること」である．

ところで，ニーチェ哲学の根本語である「力への意志」は，また，次のようにも説明されている．

「力への意志は，有るでもなく，生成でもなく，一つの情動<Pathos>である．それはもっとも基本的な事実であり，この事実から

はじめて生成，働くことが結果する.」[9)]

ここでは，「力への意志」が「有る」ではないと語られているだけではなく，「生成ではない」と語られている．これは，これまでの言象学的解明，それどころか，ニーチェの哲学そのものに矛盾するのではないだろうか.

ここで，「力への意志」が「生成ではない」と言われていることは，むしろ，これまでの言象学的文法論的理解の仕方が正しいことを裏付けるものなのである.「力への意志」とは，言象学的文法論的に，「*動詞*・する」が働き始めること（「有る」という動詞が*動詞*であると*動詞*の方から言い始めること，したがって，或る支配せんとする働きが起こること）であるから，それは，原理的には，論理的ないしは思惟的には把握できないことである．しかし，*動詞*そのものは，*Werden*（Werden）の括弧内のWerdenであるので，「生成」的でもあり，しかも，その「生成」は，思惟されえないこととして，「生成ではない」ような「生成」的なことである．そして，このような思惟されえない「*動詞*の方から*動詞*であると言い始める」ことは，ニーチェ哲学のエレメントからは，パトスと見られるのである．超越的述語（「主語-述語関係」を脱出しようとしている言葉の言うこと=すべての述語を越えたところが言おうとしていること）の出現は，論理を超えた，ないしは非論理的なことがらであり，その意味ではどうしてもパトスとして捉えられるのである．したがって，「力への意志」が「生成」ではなく，「パトス」であると語られていることは，それが，「*動詞*・する」が働き始めることであるとする言象学的文法論的理解の正しさを証明するものである．さらに，ニーチェは，そうしたパトスとしての「力への意志」が「もっとも基本的な事実<die elementarste Tatsache>」であると語り，その事実から「生成<ein Werden>」「働き<ein Wirken>」が起こると述べている．おそらく，ここで<Werden>とか<Wirken>という動詞の不定詞が使われているのは，パトスとしての「力への意志」が，「*動詞*が言い始めること」であるからであろう．ニーチェは，<ein Werden, ein Wirken>と記していて，<ein Werden und ein Wirken>と言っていない．つまり，それは，「一つの生成，すなわち，一つの働き」と訳すべきではないだろうか．もし，そうだとすれば，生成は「一つの働き」ということになろう．つまり，*動詞*が働き始めることが，述語（厳密には「超越的述語」的カテゴリー）としての「働く」ないしは「作用」ということを生じさせていることになる（§6でもう一度考察される）.

ところで，パトスという語は，ギリシア語に由来する言葉であり，本質的には「受ける」という意味を根底にしている．「力への意志」が「受身的」であるとは合点がいかないのももっともである．しかし，上で解明されたように，「力への意志」とは，言象学的文法論的に見られるならば，「*動詞*・する」の或る様態であるのであるから，*動詞*の働きを「受けている」のでなければならない．したがって，「力への意志」を，ギリシア語に精通していたニーチェが「パトス」であると言ったことも納得されるのである．「力への意志」の本質に或る「受身的」な面が存するということからも，ニーチェ哲学のエレメントが上述のようなものであることが再確認される.

さて，次に，動詞は，ドイツ語では，Zeitwort，つまり，そのまま訳せば，「時・語」であり，それゆえ，*動詞*はZeit（時）と根源的に関係している.

*動詞*は，*Werden*（Werden）の括弧内のWerdenと見ることができる．*助動詞*が言象領域の奥に退き隠れるとともに，過渡的言象として，*Werden*（Werden）が言象して来る．*助動詞*は，本質的に*未来*の*助動詞*であるが，この*未来*とは，*文法*的なものとし

て*過去*に属している*未来*である．*助動詞*は，<*Sagen*>*werden*であり，*不定詞*<*Sagen*>へこれから「成る」ということである．このことが言象領域の奥に退き見えなくなるとともに，言象して来る*Werden*（Werden）は，*過去*でも*未来*でもなく，*現在*に出て来るのである．*過去*と*未来*は，*現在*においては，隠れ退き，「無」となっている．ゆえに，*動詞*は*現在*するのである．つまり，*動詞*は，「時」が現在することそのものであり，*Zeit-wort*なのである．

ゆえに，「*動詞*・する」は，「時」が「時」としてその本質定義を言うようになることを意味する．ゆえに，ニーチェが言うように，「有る」という動詞の最内奥の本質が語りだされ，「*動詞*・する」がし始めるころ，「時」の本質もまたそれ自身を語り始めるようになるのである．Zeitの中に*Zeit-wort*が語り始める．このようなことが，本質的な意味で「歴史的」ということである．

historyの語源であるギリシア語のἱστορεῖν（ヒストレイン）は，元々は「尋ねる，探求する」という意味である．究極的に「尋ねる」ことは，「有る」ということの奥へと「尋ねること」，つまり，*動詞*が*動詞*自身を言うことへと向かうことである．このような「探求」は，しかし，「時」の本質を「時の中で」言うことであり，これが「歴史性」なのである．

「述語とは何か」という問いが歴史的に答えられるようになったころに，「時」の本質もまた歴史的に明かされるようになる．ニーチェの哲学において，「力への意志」が前者の問いに答えるとき，「時」の本質が，「永遠回帰」として明かされるのである．両者はまったく同一の事態なのである．では，なぜ，ニーチェ哲学の境位において，「時」の本質は「永遠回帰」として明かされるのであろうか．

「*動詞*・する」は，ニーチェ哲学のエレメントにおいて，歴史的な否定として「*動詞*」している．それは本質な意味でニヒリズムであり，また「対抗運動」である．*動詞*は，ここで，いわば，述語を超越して*動詞*自身を言おうと働き始めているのである．*動詞*は，*文法*上，*Werden*（Werden）の括弧内のWerdenに対応している．したがって，*動詞*が働き始めるとは，非論理的に（パトス的に）生成（Werden）となることであり，これが，「力への意志」と名付けられているのである．その意味では，「力への意志」は，本質的に或る種の「流動」である．しかし，このような意味で生成的となることは，*Werden*（Werden）の*Werden*と関係することでもある．こちらは，*助動詞*との繋がりがあることを意味する．*助動詞*は*未来*の*助動詞*であり，*未来*が*過去*に属しているということである．したがって，*動詞*が働き始めることは，*未来*が*過去*に属しているということと繋がることを意味するのである．ところが，*Werden*（Werden）においては，*助動詞*は後退して隠れ，「無」となっているのであり，ゆえに，このようなものに繋がりをもつとは，どのようなことかが問われることになる．*動詞*が働き始めることは，すでに述べたように，生成的となり，生成的となることは，必然的に，「*未来*が*過去*に属している」ということに繋がる．しかし，後者は，隠れ，「無」となっている．しかし，このような「無」は，そこから，「時」の現在が生じてきたところの「無」であり，単なる何もない無ということではない．このような「無」は，我々の理解する「瞬間」の底というようなことなのである．未来と過去が瞬間において両者が「無」くなり，その「無」から今現在となっている，こうしたことが，上で述べられたことなのである．ゆえに，「*未来*が*過去*に属している」へと繋がるとは，瞬間の奥深くにパトス的に生成的なことが関わるということである．「力への意志」は，瞬間の底深くと必然的に繋がり，瞬間の底の「無」のところにおいて，未来と過去が一つになるということに関係するのである．

「時」の未来と過去が，瞬間の奥深くで結びついている，このような「深淵の思想」と関わるようになっているのである．この「深淵の思想」がニーチェの根本思想である「永遠回帰」である．「永遠回帰」思想は，このように，本質的に，瞬間と関係する（ハイデガーもまたそうであることを述べている）．また，それは，*助動詞*が隠れ，「無」となっている以上，謎のままになっていなければならない．それを論理領域から前提抜きで証明することは原理的にできない．

「永遠回帰」思想は，ニーチェの主著と見なされている『ツァラトゥストラはこう言った（Also sprach Zarathustra)』[10] の「幻影と謎（Vom Gesicht und Rätsel)」の章において示されている．そこでは次のように語られている．

「君たちだけに私は，私が見た謎（Rätsal）を話して聞かせよう．」

このように，「永遠回帰」は，謎として示されているのである．

「おまえは私の深淵の思想（abgründlicher Gedanke）を知らない!」

「永遠回帰」は，「深淵の思想」と呼ばれている．

「しかし，ちょうどそこに，一つの門道があり，私たちはそこに止まったのである．」

ツァラトゥストラは，小人（Zwerg）とともに高みを目指して歩いていくが，そこに，「門道」が現れる．そして，この「門道」が「瞬間」である．

「この門道を見よ!　小人よ!　それは二つの面をもつ．二つの道がここで一緒になる．誰もまだその二つの道を果てまで行ったことはない．」

「それらの二つの道は相互に矛盾している．この道は．それらは頭をお互いぶつけ合っている．そして，ここで，この門道のところで，それらが一緒に出会っているところで，そうなっているのだ．この門道の名が上に書かれている．瞬間（Augenblick)，と．」

つまり，「永遠回帰」思想が語られるところは，過去と未来が相互に矛盾しながら，一緒に出会っている「瞬間」のところなのである．そこは，或る高みである．

さて，ここで，ツァラトゥストラは，同伴者の小人に或る質問をする．

「この二つの道の一つを遠くへと行くとする，どこまでも．小人よ，この道がお互い永遠に矛盾するとお前は思うか？」

この問いに対して小人は，こう答える．

「あらゆる真理は曲がっている，時間そのものが一つの円環である．」

この回答に対して，ツァラトゥストラは，「そう簡単に言うな」と怒って言う．

さて，ここで小人の答えは，誤っているのであろうか．ツァラトゥストラはその答えが誤りであると否認するのではなく，簡単なことではないと言って，或る意味で肯定しているのではないだろうか．時間は円環を成しているのではないか．しかし，それは，安易に語られるべきことではないのである．なぜか．

「門道」において出会っている過去と未来は，相互に矛盾する．「まだない」ということと「もはやない」とは相いれない．私が昨日道路で転んだということは，まだ来ないことであると言うことはどのようにしてもできないように思える．しかし，私が昨日転んだということは，いつかまた未来に起こり得るかもしれない．もし，そうだとすれば，私が昨日転んだということは，まだ来ないことであるということになるのではないか．

「時」は，言象学的文法論的に見るなら，*助動詞*を後ろにして*現在*するのである．*助動詞*においては，*未来*は*過去*に属している．このことが言象として後退することによって，その関係は「無」となり，代わって，*現在*が現れて来て，*過去*はもはや「無」くなり，*未来*はまだ「無」いと言うことになったのである．「もはやない」が過去，「まだない」が未

来である．未来はまだ*未来*ではなく，いわば永遠にそうなっている．なぜなら，*未来*は，言象の奥に退いたままであるから．同様に過去もまたそうである．しかし，過去と未来は，瞬間の奥底深くで，一つになっているのである．未来の無限のかなたと過去の無限のかなたで両者は一つになっている．すなわち，あの小人の言うように，「時間は円環である」となっているのである．しかし，このことは，ツァラトゥストラの言うように，「簡単なことではない」わけである．現在を中心として過去から未来へと流れる時間を捉える場合，未来と過去はけっして結びつかない，相互に分かれたままである．しかし，瞬間の奥深くで，両者は一つになっているのである．「秘密の蔵」，『古事記』の「タカマノハラ」（注の１で挙げた論文を見て欲しい），言象領域でそのことが見出されるのであり，ニーチェ哲学の「高み」でいわば「予見」されるようになっているのである．

以上のように，ニーチェ哲学のエレメントは，言葉そのものが「主語-述語関係」から脱出することができるようになった境位であり，そこではじめて，「*動詞*・する」が*動詞*自身を言おうと働き始め，したがって，「（パトス的に）生成」的となり，「力への意志」として，「永遠回帰」を予見することが可能になるのである．

以上で，ニーチェ哲学のエレメントが完全に規定されたものとする．

次に，このような本性をもつニーチェの哲学において，「自然科学」ないしは「自然界」はどのようなものとして捉えられるのであろうか．以下，このことへ考察を進めたい．

言象学的文法論から見るならば，いわゆる物理学的自然界は，「*動詞*・する」の最「外」界である（ここで「外」という表記がされるのは，言象学的文法論的な面を示したいからである）．では，*動詞*の最「外」界とはどのようなことか．

かつて，その最「外」界は，間接伝達論的論理学の「門外領域」と名付けられた[11]．しかし，「間接伝達論的論理学」の底に「言象学的文法論」の静かな流れの音が聞こえてきた今においては，「門外領域」は，別の意味をもつことになった．そこは，言象学的文法論的には，*名詞*の言象領域なのである．*動詞*，*現在分詞*，*名詞*という言象学的文法論的秩序が認められ得るようになったのである．

Werden（Werden）において，*不定詞*との関係が忘却されるとともに，*動詞*が言象してくる．*動詞*は，かくして，或る「忘却」を背景にしている．*動詞*は，*動詞*であることも忘却するのであり，こうして成った動詞が「有る」である．ゆえに，「有る」という動詞の奥には*動詞*の忘却が横たわる．その「忘却」は，単に無知になるというだけではなく，*動詞*自身から去って行くことなのである．火の子が火を探すように（丙丁童子来求火），「有る」は，*動詞*なのに見失われた*動詞*を探し求めるのである．かくして，*動詞は*自身の「外」へと出て行き，最「外」界にまで至るのである．そこは言象学的文法論的には*名詞*であるけれども，*動詞*が忘却されているために，*名詞*とは絶対的に認識されえない．哲学者の或る者たちは，そこが，*現在分詞*（「有る」の現在分詞としてオン<ŏν>と言われている）の更に「外」として，メー・オン（非有）の領域であると辛うじて規定した．アリストテレスだけが，独りその*名詞*の領域に明かりを手に近づいて行ったのである．彼の『自然学』はその接近の記録のようなものになっている．

かくして，言葉そのものは，「主語-述語関係」の更に「外」へと出て行くのであり，そこが，「*動詞*・する」の最「外」界なのである．このような最「外」界においても，言葉は自らを言おうとするのであるが，そこはもはや「主語-述語関係」の「外」であるために，「述語付け」ができない．しかし，最「外」界でも言葉は自らを言おうと「*動詞*・する」ので

あり，これが，「動く」ということ，キネーシス（κίνησις）である．「*動詞*・する」の最「外」界で「*動詞*・する」は，「動く」という有り方で「している」のである（有りそうになっている）．以下，「動く」は「運動」と区別され，この意味で使われる。

ところで，「*動詞*・する」が*動詞*自身を言おうと最初に働き始めるようになったところが，ニーチェ哲学のエレメントであった．このような「*動詞*・する」の最初の働き始めることは，このエレメント内では，そのようなこととしては認識されず，或る支配せんとする意志として，すなわち，「力への意志」として把握される．それは，「述語する」ことの本質を語る（「超越的な述語」が述語し始める）．ここから，あの，「*動詞*・する」の最「外」界での「*動詞*・する」の「していること」は，「力への意志」の或る外的様相（有り方）として眺められ得るのである．「主語-述語関係」内部では，「*動詞*・する」がまだ述語を超えるようにして働き始めていないのであるから，「*動詞*・する」が最「外」界で「している」こと，つまり，「動く」ことが「*動詞*・する」であると認識することは不可能である．ゆえに，思惟によって自然の本質が認識されることは本来的には有りえない（後でヘーゲルの自然哲学について言及されるので，ここで「本来的には」という語が使われている理由がその時になって分かるであろう）．つまり，そこでは，自然の奥深くで働いている*動詞*自身を*動詞*が「あれは，自分がしていることだ」と認めるようになっていない．これに対して，ようやく，「*動詞*・する」が働き始めたニーチェ哲学のエレメントにおいて，自然において「している」ものが何であるのか，「動く」とはどういうことなのかが見え始めるのである．言いかえれば，「自然とは何か」という問いに対して歴史的に初めて答え得る立場が開かれたことになる．これは，ヘーゲルの自然哲学ではまだ捉えられなかった自然の本質が洞察可能になることを意味する．（下線が施されていることが本論文全体の内容のエッセンスである）

ゆえに，ニーチェの自然科学論の中で「自然とは何か」という問いに対する真実の答えが与えられるのであり，このことを以降の考察において立証しなければならない．ニーチェの自然科学論は，まだ，批判的な性格をもつのではあるが，しかし，そこに，自然の本質に関する根本的にして重大な洞察が含まれているのである．また，アリストテレスの自然論が*名詞*へと接近する旅路にあるとすれば，当然，ニーチェの上のような意味の「洞察」と，握手し合えるようなものになっていなければならない．両者の親密な出会いもここで明らかにされるべきである．

なお，一般に「自然」は，単に物理学的自然だけではなく，いわゆる生命的自然も含む。しかし，本論文において「自然」とは，主として物理学的自然を指す。これは，*名詞*の言象とアリストテレスの『自然学』との関係を重視するがためである。

本　論

§1　真理一般についてのニーチェの見方

自然科学という学問分野も，学問であるからには，真理を求める営みに属している．ニュートンの万有引力の法則は，嘘であるから，ニュートンはそれを求め，発見したなどということをおそらく誰も信じないであろう．その法則が真理に違いないとニュートンは考え，他の人々もまたそれは確かに真理であり，虚偽ではないと確信したのである．しかし，次のニーチェの言葉は，そうした我々の確信を動揺させる．

「私から真理が語る．だが，私の真理は恐ろしい．なぜなら，これまで人は虚言を真理と呼んできたのだから．」[12)]

なにゆえ，ニーチェは，たとえば，ニュートンの法則とかアインシュタインの相対論な

どを虚言だと言い得るのであろうか.

このことのもっとも深い根拠は，次のニーチェの言葉の中にある.

「この世界は力への意志である．そして，それ以外には何もない！　そして，君たち自身もまたこの力への意志であり，そして，それ以外ではない！」[13)]

「この世界」とは，序論で述べたように，言葉自身が「主語-述語関係」になっている事態（論理領域）であり,「力への意志」とは，この関係から言葉が初めて脱出するような門が開かれ，脱出しようとしている態勢にあることである，つまり，言葉が,「述語」を超え出て，それを上から見下ろしつつ,「述語」の本質を語ろうとしていることである．*動詞*が*動詞*であることを忘却して「有る」という動詞となると，そこに「この世界」という現象が起きて来る．そして，*動詞*が「*動詞*・する」を「し始める」ようになると，その「有る」という動詞の「最内奥の本質」が言われ始め, ここにおいて「力への意志」がニーチェによって言われるようになるのである．ゆえに,「力への意志」は，そこで「述語」の本質が語られようとしている境位，すなわち,「主語-述語関係」の全体を見下ろす位置にあるのである. つまり,「この世界」の全体が,「述語」をしようとしていることと見なされるのである．かつて，ヘーゲルが，すべては推論であると言ったが，このことの更に深い真相がニーチェによって上のようにして把握されたのである.

「力への意志」は，序論で述べられたように,「*動詞*・する」が初めて働き始めることであり,「*動詞*・する」の奥所と繋がっている．そこは，言象領域であり，間接伝達論的領域，すなわち,「虚-言」領域である．ここで「虚-言」領域とは，言うけれども何も言っていないことが成立している領域，ハイデガーの言う，<das sagende Nichtsagen（言いつつ言わない）>ということが必然である領域である[14)]．真理はこの「虚-言」領域から「虚-言」を覆うようにして起きてきたのである．かくして,「述語」の本質を語り始めている「力への意志」は，すでに「主語-述語」で語っているのではなく，本質的に「虚-言」的に語ろうとするのでなければならない．アリストテレスの言うように，真理は,（主語を述語するという）言明を「座」としている．ゆえに，この「座」から立ち上がり，それの奥所に帰り行こうとしている「力への意志」は，真理を語っているのではないということになるのである．これが,「私の真理は恐ろしい」と言われていることである.「この世界」は,「力への意志」であるとは,「この世界」は「主語-述語」関係の領域であるから, まだ「虚-言」になっていず，したがって,「虚-言」からすれば嘘の世界であり（「虚-言」を言わないようにとそれを覆い嘘をついているという意味），その真相は,「虚-言」を語ろうとしている領域であるということなのである．ニーチェの哲学は，このような原理に基づいて成立しているのである．そして，このような原理から，上のような言葉が必然的に語られるようになるのである.

「本質的に虚偽である世界においては，誠実で真実であること（Wahrhaftigkeit）は反自然的な傾向であるということになろう．このような傾向性は，虚偽の特により高い能力（Potenz）のための手段としての意味しかもつことができないであろう．真なるもの，つまり，有るものの世界が偽り造られる（fingiert werden）ことができるためには，まず最初に誠実で真実なる者が，創造されていなければならなかったのである.（このような誠実で真実な者が自分を「真実で誠実」と信じるということを含めて）」[15)]

「虚-言」ではなく，したがって，嘘を語ろうとしている領域，すなわち,「虚-言」を覆いそれを隠そうとして真理を語ろうとしている領域は,「主語-述語関係」の領域であり「有

るものの世界」，すなわち，「有る」という動詞の支配領域，「この世界」である．そこは，まさに，ヘーゲルの言う，推論そのものである．なぜなら，推論とは，「主語-述語関係」，「AはBである」の「ある（有る）」の根拠を明らかにしようとすることであるのだから．この領域で，言葉は何か「有るもの」について語る（述語する）ことになり，したがって，その「何か」と言明の一致と不一致との関係が生ずる．一致すれば，「真」，一致しなければ「偽」とされる．このことが固定化されると，そこに，真実であると不真実であるという対立が起こる．しかし，このようなことの真相は，「虚-言」を語ろうとしている言葉の固有の動向である．したがって，真実であることは，言葉が「虚-言」を語ろうとしていることに他ならない．真実なることは，「虚-言」を語ろうとしていることの一つの様相ということになるのである．「力への意志」の境位は，このような「虚-言」を語り始める境位であるから，「虚-言」の方が真であり，まだ「虚-言」にはなっていない「主語-述語」関係の領域は嘘にして虚偽の世界と見えるのである．かくして，これまで真理と見なされてきたことは全部「嘘」ということになる．「私の真理は恐ろしい」とは，虚-言を語れるようになったことを意味するのである．当然，あのニュートンの法則も嘘なのである．ここから，次のような最も根本的な洞察が可能になる．

「『思考される』前に，すでに『偽り造られている（gedichtet worden sein)』のでなければならない．」[16)]

「思考される」前に，最初に「主語-述語関係」が，言葉によって，つまり，「虚-言」によって，<dichten>されている，つまり，「作り上げられている」のであり，このことがニーチェの立場から見られるならば，「偽り造られている」となるのである．なぜなら，ニーチェ哲学のエレメントは，上で示されたように，「主語-述語」関係から脱出しようとする態勢にあるために，「虚-言」はまだ「虚-言」そのものとは知られず，偽ることという意味での虚言することと見えているからである．そのようなエレメントの中で，「思考する」前にこのような偽ることとしての「虚言する」ことが思考の基盤を造っていると見えて来るのは必然なのである．

我々の世界は，「有るもの」の世界である（主語は，我々には対象認識の「対象」となっている）．しかし，それの本質的構造は，ここで示されたように出来ているのであり，ニーチェは，この構造をその立場から明らかにしているのである．そして，このような構造性を照らし出すことができる光は，ただ，言葉が「主語-述語関係」から脱出する態勢になっているところにのみ存するのである．

さて，言葉が「主語-述語関係」から脱出しようとしているということは，言葉が「主語-述語関係」から脱出していることとは別のこととして語られるのである．なぜなら，ここでは，言葉は，まだ，言葉自身を言うということにまで進んでいないからである．言葉は，まだ，「主語-述語関係」との関係を真に立ち切っていないために，言葉が「主語-述語関係」から脱出しようとしていると語るまでになっていないのである．つまり，言葉が「主語-述語関係」から脱出しようとしていることは，まだ「述語」されているのである．ここでの「述語」は，言葉が自身を言おうとすることとして「意志する」ということである．何らかの意味で「言おう」という意志が「述語」となるのは必然である．何に成ろうとしているのか．当然，言葉が言葉に成ろうとしているのであるが，このことは，まだやってこないことであり，「何に」ということでない何かに成ろうとしているのである．意志という「述語」の奥へと意志するというようになっている．ハイデガーは，このような意味で，ニーチェの「力への意志」を「意志への

意志」と理解した．言葉が「主語-述語関係」から脱出しようとしている事態，すなわち，「*動詞*・する」がし始める境位は，「意志への意志」という「述語」が付けられ得る．ここでは「述語」は，超越的述語の自己限定というように見ることも可能である．なぜなら，「主語-述語関係」を脱出しようとしているとは，「述語」を超越せんとする「述語」ということになろうからである．しかし，西田哲学とは異なり，ニーチェの場合は，言葉が「主語-述語関係」から脱出するということに即してことがらが捉えられているのである．ゆえに，この事態にふさわしい「述語」は，意志ということになる．そして，ここでの「意志」は，「主語-述語関係」の中でのことがら（たとえば，「生きよう」というような意志）ではなく，「主語-述語関係」から脱出しようとしていること，まさに，超越的述語的なことである．意志は何に向かって意志するのか，「何」とは言葉であるのに，言葉とは見えていないとすれば，その「何」は，なにか？ニーチェは，この「何」をMacht（マハト: 力，支配力）と見たのである．なぜ，言葉が「主語-述語関係」から脱出しようとしているところで，言葉に相当することがMachtなのであろうか．

「虚言は力（die Macht）である」[17)]

本来，「主語-述語関係」から脱出しようと「意志」しているものは言葉（ここでは*動詞*である）であるが，単にそれは言葉ではなく，言葉を言う言葉であり，間接伝達的に言うことである．このような言葉に成ろうとすることは，「虚-言」的と成ろうとすることである．そして，これがMachtなのである．それは，たしかにドイツ語としては，支配力とか力という意味であるが，その真相は，「虚-言」を言おうとする意志なのである．というより，意志とは「虚-言」への意志なのである．まだ言葉は，「虚-言」を言うまでには至っていないけれども，「主語-述語関係」から脱出しようとしているところでは，「虚-言」しようとする意志が認められるのである．そして，このことが「力への意志」と呼ばれるのである．

すでに示されたように，真理は「主語-述語関係」を座としている．その座は，「虚-言」を言おうとする意志を根底にしていると「力への意志」の視座からは見えるのである．真理は虚言を語ろうとしていることに座をもつと洞察されることになる．

§2 「出来事」の算定可能性

何事かの法則が有り，それを見出すためには，その何事かが，毎回毎回異なるようになっていないことが前提される．たとえば，ニュートンの第三法則は

$F=G・M・N/R^2$

というように記述されるが，これが，たとえば，100年後には成り立たないというようでは困るのである．自然の世界が時間とともに，いわばその法則性を変えないことが暗黙に了解されている．時間とともに，自然の事象は変化するけれども，そうした変化の内にあって，時間とともに変化しない何かが法則として有るはずだという前提が存している．法則そのものは時間とともに変わらないのでなければならない．法則が3秒ごとに，5分ごとに変化し，この変化の法則もないとすれば，人はどのようにして自然法則を見出すことができるであろうか．このようなことがらをここでは，ニーチェの言い方に沿って，「出来事（Geschehen）」の「算定可能性（Berechenbarkeit）」と呼ぶことにする．すべての物理学はこのことを根本的前提としている．これを抜きにして物理学は成立することができない．それはまだ一般に「法則」とは言えないそれの前提であり，自然を何らかの意味で算定できると見なすことである．この「算定可能性」についてニーチェは次のように考えている．

「或る出来事の算定可能性は，次のことに存するのではない，すなわち，或る規則が守られたとか，あるいは，必然性が聞き取られたとか，あるいは，原因性の法則が我々によってすべての出来事の中へ投影されたということに．算定可能性は，『同一的な場合』の回帰（Wiederkehr）に存するのである．」[18)]

一体，ここで思索されていることは，どのようなことなのであろうか．これまで解明されたニーチェ哲学のエレメントの本質から解明してみたい．

ニーチェの哲学的思惟のエレメントは，すでに確認されたように，言象学的文法論的には，「*動詞*・する」が働き始める境位である．言葉は，ようやく「主語-述語関係」から脱出するための開かれた門を見つけ，「脱出」しようとする．この境位から見ると，言葉は，これまで自分の故郷への道とは逆方向に向かっていたことが分かる．その逆方向には別の門があり，この門の向こうは，「主語-述語関係」のいわば門外の領域（*動詞*の最「外」界=*名詞*の言象領域）であり，ここから言葉は，「主語-述語関係」へと帰ろうとしている．なぜなら，言葉とは「言う」ことであるからである．この「帰ろうとしている」ことは，言葉の言おうとしていることとは見えない．それが，「動く」ということである．「*動詞*・する」が働き始めたところから見ると，その「帰ろうとしている」ものが自分であると分かるのである．*動詞*の最「外」界すなわち「門外領域」から帰ろうとして「動く」と言われている自分自身を，「*動詞*・する」は，はじめて認めるようになる（ニーチェにおいては，「力への意志」の或る外的様相として）．「*動詞*・する」は本質的に*文法*的なことであるので，あたかも白いノートに「書かれていた」ことであり，すでに起きていたことである．「門外領域」から戻ろうとしていることは，或る時間の中で起きることではなく，かつてすでに起きていたこと，「同一の場合」の「回帰」，同じことの「何度でも」である．自然界における運動（「動く」ということが「主語-述語関係」から見られた場合が「運動」である．以下この意味で「運動」という語が使われる．）は，このようなことであり，したがって，「永遠回帰」しているのである．この理によって運動は，「算定可能性」を得て，したがって，そこに法則というようなことが算定され得るのである．この理を前提することで，すべての運動法則が成立可能になる．したがって，ニュートンの力学的法則もまたこの理を土台にしているのである．

ここでは，自然界における運動について論じられたが，一般に，「*動詞*・する」が働くことは，このような具合になっている．つまり，「*動詞*・する」ということは，*文法*事項であるので，その限り，すでに起きていたことである．しかし，「*動詞*・する」は，*文法*性を失っている．それは「有る」という動詞になっているのである．ゆえに，「有る」という動詞の中に，「*動詞*・する」が働き始めることは，「有る」という動詞の本質規定をしようとすること，つまり，「力への意志」が認識されることである．「有る」という動詞の中に潜む「*動詞*・する」は，「有る」ではないと言うことでもあり，しかも，単なる論理的否定ではない．これは，述語としてはWerden（生成）と言うほかないことであるのは必然である．つまり，「力への意志」は，この意味での生成（パトスとも言われる）であり，したがって，それは，「*動詞*・する」が働き始めることなのである．そして，「*動詞*・する」は，すでに起きていたことである．ゆえに，生成は，すでに起きていたのである．「有る」ではないと言うところの「生成」は，「すでに起きていた」となっているのでなければならない．しかも，単にそれは過去に一度起きたと言う意味ではないことは明白である．なぜなら，*文法*上起きることは，無「時」的にすでに起きていたことであるから，永遠に，

未来にもすでに起きていたことになるのである．しかも，生成は，「*動詞*・する」であり，*文法*性を失っていることでもあるから，「時」の中にあることになる．このような有り方が「永遠回帰」と見なされるのである．ニーチェは，すでに述べたように，「永遠回帰」を「瞬間」から思索するのであるが，また，今ここで述べられたようにも考えている．

ニーチェは次のような言葉を語っている．

「要旨再説

生成に『有る』の性格を刻印すること，これが最高の力への意志である．

すべてが回帰することは，生成の世界が『有る』の世界へ最極度に接近することである．すなわち，考察の頂き」[19)]

上で示されたように，ニーチェが把握している「生成」とは，「有る」という動詞の内奥で働き始めた「*動詞*・する」であり，したがって，何らかの意味ですでに起きていたこと，それも，無「時」的な意味ですでに起きていたという意味合いをもつことでなければならない．つまり，ここでの生成は，*文法*的な性格を持つようになっているのである．しかし，ニーチェの立場においては，「*文法*的」とは認識されない．ところが，生成は，どうしても*文法*的性格をもたなくてはならないのである．この*文法*的性格は，すでに示されたように，あたかもノートに「書かれてある」ようになっていて，したがって，ある種の固定性，永遠性であり，「有る」的性格とニーチェには理解される他ない．なぜなら，ニーチェは「有る」ということを一種の固定化と見ているからである．したがって，「有る」の性格を刻印することが，「力への意志」の最高のものと言われているのである．「生成」に「有る」の刻印を押すとは，「生成」の中に*文法*的なものを見出すということである．

また，生成が*文法*的な面をもつようになることは，かつて起きていたことが，永遠に起きるということであり，これは，無「時」性への極度の接近を意味する．

「主語-述語関係」の門外で「*動詞*・する」が「する」場合も，そこでは生成が認められる．しかし，門外領域での生成は，生成とは言われず「動く」と言われるのである．ゆえに，「動く」こともまた「力への意志」の或る様相と把握され，「永遠回帰」的になっているのである．自然界とは，このようになっていることであり，これ以外ではありえない．ニーチェの自然科学論は，根本的にこのようなことを明らかにしようとしているのである．その自然科学論によって，極めて深い意味で，自然とは何かという問いに対する歴史的に唯一の解答がはじめて提示されるのであり，同時に，また，それは，従来の自然科学を本質的に批判して，それの根底を明らかにするものとなるのである．

今，上で解明されたことは，また，ニーチェによって次のようにも言われている．

「創作すること，意欲すること，自己否定すること，自己自身を超克することとしての生成．すなわち，主観はなく，或るすること<ein Tun>，定立すること，創造的にであり，いかなる『原因と結果』もなく．」[20)]

「*動詞*・する」としての生成は，当然，主観ないしは主語のない「する（Tun）」であり，創造的である．そこには，働きと働く者との隔たりはなく，したがって，原因と結果という関係性はない．ここで引用されたニーチェの言葉は，これまでの言象学的文法論的解明の内容と完全に合致するものであり，その解明の正しさを証明する．

ニーチェの自然科学論は，以上のような基礎の上に成立しているのであり，このような自然科学論は，単なる一自然論という意味をもたず，根本的な自然の本質規定に迫るものなのである．ハイデガーは，ニーチェの命題は反駁不可能であると述懐したが，まさに，ニーチェの自然科学論もまた，自然の本質を正しく洞察する諸命題から成り，それらは，

反駁できないものである．なぜなら，自然とは,「*動詞*・する」が動詞の最「外」界で「している」ことであるからであり, ニーチェは, その「*動詞*・する」を「力への意志」として，生成として捉えているからである．ニーチェ以前にこのような把握を誰もすることがなかったことは明白である．

§3　絶対空間と空間

自然科学全般において,「空間」は基本的概念である．空間の中で物理現象が成立している．ニーチェは空間について次のようなことを語っている．

「私は絶対空間を信ずる．力（Kraft）の基体（Substrat）として．つまり，力は限界づけられていて, 形態的となっているのである．時は永遠である．しかし，自体的には空間も時も存在していない．」[21)]

一体，ここではどのようなことがらが眺められているのであろうか．絶対空間はどうして「力の基体」なのであろうか．また，絶対的空間は存在すると信じられるのに，なぜ,「自体的には」空間は存在しないのであろうか．時と空間とはどのように関係しているのであろうか（「時」と「空間」の関係については，あらためて§11で考察される）．

最初に,「力への意志」と絶対空間との関係は言象学的文法論的にはどのような関連であるのかを考察してみたい．

すでに明らかになったように,「力への意志」とは，言葉が「主語-述語関係」から脱出しようとしていることであり，これは,「*動詞*・する」が論理領域において働き始めること,「*動詞*・する」が「し始めること」である．また,「主語-述語関係」の「門外」領域で，すなわち，*名詞*の言象領域で,「*動詞*・する」が働くことが「動く」ことである．ゆえに，*文法*的な規定性の「動く」ということは，かの「門外領域」で「力への意志」が働くことであると「力への意志」の立場からは見えるのである．「*動詞*・する」は, そこでは,「*動詞*・する」そのものとして働くのではなく,「動く」と言われることがらになっている．同時に,「門外領域」もまた「門外領域」とは語られることができなくなっていて，つまり，*名詞*の領域とは認識できなくなっていて,「*動詞*・する」の最「外」界として，そのことがそこに限界づけられているその「そこ」として,「空間」と言われることがらになっているのである．要するに，本来，*文法*的なことがらであることが，認識できなくなっているために,「力への意志」は,「空間」的なことの中で「動く」的となるのである．「空間」の中で「動く」的となっているところの「力への意志」も，本来的な「力への意志」ではなく，Kraftと見なされる．

「私は絶対空間を信ずる」とは，*文法*的な意味での最「外」界が，ニーチェの哲学的エレメントからは，*文法*的な意味で「それである」と認識できないけれども，何らかの意味でそれが「ある」と信ぜざるを得ないということを語っているのである．したがって,「絶対的空間」とは，かの「門外領域」,「*動詞*・する」の最「外」界（*名詞*の言象領域）のことであることは明らかである．「*動詞*・する」の最「外」界,「主語-述語関係」の「門外領域」で,「*動詞*・する」が働くようになる，つまり,「動く」ということが起こるのであり，したがって，このような最「外」界がKraftの基体になるのである．ゆえに，ニーチェがここで語っている「基体」とは,「運動する」ものが走り回れる運動場のようなものではなく，そこから「力への意志」が「動く」的というようになっているその限界を成しているものを意味するのである．「Kraftは限界づけられていて」というニーチェの言葉は，このことを言おうとしているのである．この命題もまた反駁できない命題である. というのも，それは言象学的文法論的なことがらを「力への意志」の立場から見たものであるからであ

る．同じ眺めにアリストテレスも別の道から近づいて行ったのである（アリストテレスは空間とは言わず場所〈トポス〉と言った）．両者はここで或る意味で出会い，握手するのである．

したがって，ここで「基体」という語は，誤解を生みやすい性格をもつ．Substratは，「体」というような意味を元々含んではいないのである．この語の語源である<substernere>というラテン語の原意は，「下に広げる，下にまき散らす，下に置く」という意味である．<sternere>は，「投げ落とす」「まき散らす」などの意味をもち，<sub>は「下に，支配下に」という意味をもつ．Kraftは何かの支配下に置かれているという関係性においてSubstratは考えられなければならないのである．「力への意志」は，「門外領域」の支配下においてKraftとして働くのである．このようにKraftを条件づけているものが「絶対空間」と考えられているのである．「Kraftは限界づけられている」ということは，このことを言うのである．「つまり」ということ（原文では，:という記号で示されている）は，「KraftのSubstrat」ということの真意が，「限界づける」ものであることを表している．ゆえに，「絶対空間を信ずる」という表白は，深意を蔵している．ニーチェ哲学の境位からは認識されないような*動詞*の最「外」界が「絶対空間」として信じられているのである．この「外」は*動詞*の最「外」界として，*文法*的意味をもつのであり，まさに，ニーチェの哲学的境位からは認識できないのでなければならない．しかし，いわばその「存在」をニーチェはある意味で認めているのである．このような意味での「空間」，つまり，「絶対空間」は，Kraftの「基体」という意味をもつだけではなく，「自然」そのものの「基体」を意味する．「空間」の本質には，「私は信ずる」という根本的な本質性が存するのである．「空間とはこれこれである」と認識されるということは，「空間」を知らない者の無知の告白である．「私は絶対空間を信ずる」ということがかえって「空間」を正しく認識していることの証拠となるのである．「なんだ，ニーチェの空間認識はたいしたことはない」などと早計に判断してはならない．このニーチェの言い方こそ，空間の本質規定そのものに必然的なことなのである．ここのところが正しく理解されることで，なぜ，「空間それ自体は存在しない」と言われるのかが明瞭になるのである．「絶対空間」は存在し，「空間」は存在しないということが言われているのではなく，両者は，「私は信ずる」という空間認識において同一のことが意味されているのである．

ニーチェの哲学のエレメントからは，「*動詞*・する」の最「外」界（「主語-述語関係」の「門外領域」），すなわち，*名詞*の言象領域は，「絶対空間」と見なされ，その存在が「信じられる」．また，そのエレメントにおいては，最「外」界は，言象学的文法論的に認識されることはない，すなわち，そこは*名詞*であると認識されえないので，「私は絶対空間（の存在）を信ずる」ということになる．最「外」界で「*動詞*・する」がしていることは「動く」ということである．つまり，最「外」界は，「*動詞*・する」の最「外」界であるのに，「*動詞*・する」は，この最「外」界の中に居ることになる．最「外」界の中には，「*動詞*・する」は居ないはずなのに，どうしてその中に「居る」のだろうか．それは，最「外」界が「*動詞*・する」の最「外」界であるからである．最「外」界は，「*動詞*・する」に依存し，これなくしては存立できないのである．「*動詞*・する」が最「外」界の中に居るとは，この関係を「*動詞*・する」は，「言おう」とすることなのである．この「言おう」とすることは，「主語-述語関係」から脱出しようとする言葉の動向と実は同一のことであるが，「力への意志」そのものではなく，それの，最「外」

界内部でのいわば「兆し」であり,「前兆」,「徴候」のようなものである．したがって，こうした「力への意志」の「徴候」のようなことは，ニーチェの哲学からもそれとして捉えられ得ることになる（後でSymptomとして考察される）．ニーチェの立場からは, この「（力への意志の）徴候」が「動く」ということであるとはまだ認識されないけれども, それが, 自然の本質的なものであるということは認識されるのである．「Kraftの基体としての絶対空間」とは，このような構造性を明かしているのである．言葉が「門外領域」で,「言おう」としていることが，ニーチェの哲学のエレメントからは,「Kraftの基体としての絶対空間」という関係において見えているのである．ゆえに，ここでKraftという語は，単に物理学的な意味をもつだけではなく，もっと本質的な，根源的な意味，すなわち,「力への意志」の「徴候」のようなものとして捉えられているのである. あえて言えば, Kraftとは実は「力への意志」の或る外的様態であり，後で出て来る「力への意志」量なのである．

§4　運動

前節で示されたように，ニーチェ哲学のエレメントから見るならば, 言葉が「門外領域」で「言おう」としていること，すなわち，*名詞*の言象領域で,「*動詞*・する」が言おうとすることは,「動く」こととは，認識されず,「力（Kraft）」が限界付けられ，条件づけられていることとして眺められている．*名詞*の言象領域の中で「*動詞*・する」が言い始めることは,「力への意志」が「絶対空間」においてその「徴候」を見せ始めることと捉えられるのである．したがって，ニーチェの哲学のエレメントからは,「動く」ということは, 本質的には「力への意志」の「徴候」であるということになる．ゆえに，ニーチェとしては，運動ということの本質は,「力への意志」であると主張するはずであるが，彼は,「動く」ことを真に認識していないということになる．このような事情を次のニーチェの言葉の中に確認することができる．

「このような作用の世界を，見える世界-視覚にとっての世界-へと翻訳すること-が運動（Bewegung）という概念である．ここでは，常に，何かが動かされるということが補われて理解されている．」[22)]

すでに注意しておいたように, 本論文では,「運動」と「動く」こととは区別される。後者は, 言葉が「門外領域」で「言おう」とすることであり, 前者は, この後者が「主語-述語関係」から見えたみものである．ここでのニーチェの言い方では,「見える」世界へと「翻訳された」ものである．後者をニーチェは，真にそのようなこととして，つまり，言象学的文法論的に，認識しているのではなく，本質的には「力への意志」に基づいて捉えているのである．ここでは, 本質的には「力への意志」に基づくことであることを「このような作用の世界」というように表している．これが「力への意志」を本質としていることは，そのような作用をニーチェが「力への意志」量<ein Quantum <Wille zur Macht>>と名付けていることからも明白である．ここで「力への意志」が「量<Quantum>」として理解されているのは，前節の限界づける「絶対空間」の故である．この「絶対空間」のゆえに,「力への意志」は，ある「形態」性を有し,「作用の世界」というように見えるのである．要するに,「動く」ということは，ニーチェの立場からは,「力への意志」を本質としていること,「力への意志」量として捉えられるのである．そして, このような「力への意志」を本質としている「作用の世界」が「見える世界」へと翻訳されると，それが,「運動」である．さらに, そのような意味の「運動」は,「何かが動かされている（何かが動く）」というように捉えられるのである．

「*動詞*・する」の最「外」界で,「*動詞*・す

る」がしていることが「動く」ということである．「*動詞*・する」の最「外」界は，「*動詞*・する」のという面があることを言わざるを得ず，これが，最「外」界で「*動詞*・する」が「していること」である．「*動詞*・する」は*文法*的なことがらであるから，「眼に見えない」し，そもそも「認識できない」ことである．それは「主語-述語関係」の根底に流れるいわば生成の流れのようなものである．この生成の流れは，「主語-述語関係」とは別のものではなく，その関係となっているものである．しかし，「*動詞*・する」の最「外」界は，「主語-述語関係」の「外」にあることであるから，その最「外」界での「生成の流れ」は，絶対空間的なことであり，「動く」ということである．ゆえに，「動く」もまた「眼に見えない」．しかし，「主語-述語関係」の「外」になっていることを「主語-述語関係」の中へと「翻訳（übersetzen）」することはできるのである．我々人間的思惟にとっての国語へと「分かりやすく」翻訳され得るのである．「何かが動かされている」というように「主語-述語関係」に「越えて定立する（über-setzen）」ことができる．「動く」は，*動詞*の最「外」の領域で「*動詞*・する」がしていることであるから，このことを翻訳する場合には，本来は，「動く」という述語をつけてはならないし，「動く」ところの主語を措定することはできない．しかし，その翻訳は「何かが動かされる」ということになり，また，何かが「動かしている」ことになる．

ところで，「*動詞*・する」の最「外」界で「*動詞*・する」がしていることが，「動く」ということであるとするならば，どうして「何かが動く（動かされる）」というように「翻訳」されるのであろうか．

「*動詞*・する」の最「外」界とは，言葉が「主語-述語関係」の外で「言おう」とすることである．したがって，そのような「外」で言葉が「言おうとする」ことは，「主語-述語関係」で言われることができない．何かの主語が有り，それの述語もないということになる．しかし，ここで「外」ということは，*文法*的な意味での「外」であり，思考された「外」ではない．このような*文法*的意味をもつ「外」は，もはや*動詞*ではない*品詞*として，*名詞*として理解されるべきである．*名詞*は，非常に深い意味でデュナミス<δύναμις>，すなわち，可能態である．「外」は，どこまでも，「*動詞*・する」の「外」であり，「*動詞*・する」との関係において「外」であるのである．*名詞*は，独立的な*文法*事項ではなく，*動詞*にとって必然的な，それに属している*文法*事項である．このような*名詞*は，どのように*動詞*と関係するのかが言われなければならない．通常の文法においても，一般に，名詞は，格変化をする．たとえば，「川」という名詞は，「川は」となって主語となり，「川は，流れる」というように動詞と関係する．その意味では，名詞は，「主語-述語関係」に入るために，格変化を起こさなければならない．つまり，*名詞*は，「主語-述語関係」に入ることが可能であるという本質をもつ．「主語-述語関係」は，言象学的文法論的には，言葉が言葉に成ろうとしている境域である．まだ言葉は故郷への道を見出すことはできないが，そこへと帰ろうとしている．述語するということの意味は，このような「帰ろうとすること」なのである．したがって，*名詞*は，このような言葉の帰ろうとしていることに成る可能性をもつことがらであり，この意味でデュナミスなのである．*名詞*は*動詞*の「外へ」という動向であるから，或る意味で，故郷へ帰ろうとしているのではなく，その逆方向への動向であると言える．しかし，故郷へ帰ること，それに対して逆方向へ行こうとすることは，実は，故郷へ帰ろうとしていることなのである．帰ろうとすることができるから，それとは逆向きに向かうのである．この事情は，南へ行こうとする者が，北を南と思い込んで北へと行くにも似て

いる．言葉は，*名詞*においては，このように，可能態として，「言おう」とする，すなわち，自身の故郷へ転倒的に向かうのである．言葉が，自身の「外」へと転倒的に向かうことは，*動詞*が，それの外へと自己の生まれ故郷を探しにそれ自身から去って行くことであり，これが，「動く」ということなのである．こうして，*名詞*において「*動詞*・する」ことは，転倒的に「*動詞*・する」こと，絶えずそれ自身から外へと去って出て行くこと，「動く」ことになるのである．このようになっていることが，「主語-述語関係」と成り得ることなのである．「*動詞*・する」が転倒的に「*動詞*・する」ことは，「主語-述語関係」の可能性であり，この関係に翻訳可能である．しかし，「動く」ことは，「主語-述語関係」内のことがらではない．それに「まだ成れない」のであり，そこから「出て行こうとしている」のである．「主語-述語関係」へなり得ることとして，「主語-述語関係」の外へと出て行く，それを「主語-述語関係」で表すとすれば，比喩的となるであろう．何かが去って行くというように比喩的に表されるであろう．しかも，それは，可能性としてである．影像的なことである．このような実状をアリストテレスは，次のように表した．

「可能的にあるものとしての可能的にあるもののエンテレケイアがキネーシスである．」[23)]

エンテレケイアとは「*動詞*・する」のことであるから，「*動詞*・する」が*名詞*において「していること」が「動く」ことであるとここで言われていることになる．このような定義は比類なき正確さで「動く」ということを言い表していることになる．ニーチェはもちろんここまで透徹した見方はできなかったのであるが，「力への意志」量という言い方で「動く」ことの真相に迫っているのである．

上のアリストテレスによる「動く」ことの本質規定は，単に運動に限定されているのではなく，自然界とは何かという本質規定にもなっていることは明白である．*名詞*の言象領域が自然界であり，そこでは，*名詞の格変化*ということが起きていて，この「*名詞の格変化*」が，上のような定義で語られていることなのである．

*名詞*において，「*動詞*・する」は転倒的に「*動詞*・する」．転倒的に「*動詞*・する」ということが「動く」ということである．このことは，「主語-述語関係」において「言おう」としていることの影像というように捉えることができる．この「言おう」としているものは言葉であるが，それは「主語-述語関係」の中では見えなくなっていて，「述語」として語られているのである．「主語-述語関係」の中に潜むこの「言おう」とすることは，本来は，「主語-述語関係」を否定するものであり，これは，ヘーゲルによってBegriffとして把握された．そして，このような否定の肯定的本質の現われが「力への意志」である．そして，かの「否定」的なものの真相である「言おう」ということの影像が「動く」ということである．「言おう」ということの影像であるとはまだ認識されない場合には，「何かが動く」という仕方でことがらが捉えられるのである．「まだ」である場合とは，ヘーゲル的とニーチェ的ということになる．ニーチェの場合は，この「何かが動く」ということが一つの誤りであると気づかれている．このような哲学者の見方までになっていない通常の悟性的な見方では，当然，どのような場合でも，「何かが動く」は絶対的事実ということになる．「何かが動く」というように捉えられるのは，このように，「主語-述語関係」の外で「言おう」とすることが，「動く」ことであるとは認識されていないからである．「*動詞*・する」の真相へと近づく程，「何かが動く」ということの誤りに気付くようになるのである．「動く」とは，「主語-述語関係」の外での影像的な「述語」に超越することであり，転倒的に言葉が「言おう」としているこ

となのである．不思議なことに,「動く」とは，今いる場所から出て行こうとしていることであり，それは,「主語-述語関係」から脱出して行こうとしている言葉の本来の動向の影像になっているのである.「主語-述語関係」の中で言葉はその自分の今いるところから，出て行こうとしているのであるが，それの影像もまたその今いるところから出て行こうとしているのである．これは，我々人間存在がこの世に居る姿と重なる．この世から逃れようとしながら，そこに留まる．同様に，かの影像においても，何かがその居場所から出て行こうとしているのであり，これが「何かが動く」ということなのである.

このように,「何かが動く」のではなく,「主語-述語関係」の外で言葉が「言おう」としているのである．言葉が「言おう」とすることは，ニーチェによって「力への意志」と捉えられた．したがって，彼は,「何かが動く」ということの誤りに気付くことができるのであり，運動，すなわち,「何かが動く」ということの真相は「力への意志」の「徴候」であるとの認識をもつのでなければならない．そして，運動が「力への意志」であるにしても，それの影像的なものであることも認識できるようになっていなければならない．この影像性が「力への意志」量ということである.

「動かされる」という受動態の「訳」は，このように，本来主語が立てられないのに立てた「翻訳」の本質的「誤り」，すなわち，誤訳の表現と見るべきである。能動する何かと受動する何かが立てられているのであり，それは,「主語-述語関係」の領域内部において成立するのである。

§5　力と運動

以上のように,「主語-述語関係」の「門外領域」, すなわち,「*動詞*・する」の最「外」界，あるいは，言象学的文法論的*文法*事項としての*名詞*の言象界において，言葉が「言おう」とすることが「動く」ことである．*名詞*の領域において「（言葉が）言おう」ということは, 論理領域ではそうは言われない．つまり，「言葉が」ということも，そこでは，見失われている．また，当然,「言おう」ということもそこではそれとしては言われない．そこでは,「何かがその居場所から外へと出て行こうとしている」というように言われるのであり，このようになっている「（言葉が）言おうとすること」が「主語-述語関係」の世界の国語に「翻訳」されると，いわゆる運動となるのである．ゆえに，運動とは「動く」こととともになっていることである．同じことが，ニーチェの言葉では「絶対空間」で，別様に言われるのである.「言おう」という一種の意志は，ニーチェによって「力への意志」として捉えられた．そして，運動は，この「力への意志」の別様に言われていることである．ニーチェは，これを「力への意志」のSymtom（ジュンプトーム）という言い方で表現している.

ニーチェのこの表現，Symptomは，深意を含んでいる．通常，この語は，医学的な意味で「症候，症状」という意味，また，前兆，きざし，特徴などの意味をもつ．なぜ，ニーチェは，この語を用いたのであろうか.

Symptomの語源は，ギリシア語の，συμπίπτειν であり，συμは,「共に，一緒に」という意味，また，πίπτειν は,「倒れる，落ちる，陥る」という意味である．両者からなるσυμπίπτειν は「ぶつかり合う，生起する，たまたま起こる，一緒になる」といった意味をもつ．ある病気とともに一緒になって生起することが，病気の「症状」である．病気ではない場合にも，同様の意味で,「一緒に起こる」ことは，Symptomなのである．おそらく，ニーチェもまたこの語源的な意味を考慮して，この語を用いたものと思われる.

実際, 上で述べられたように, 運動と「動く」との関係は，まさに，συμπίπτειν なのであ

る.「動く」とは，言葉が*名詞*の言象領域で「言おう」とすることであるが，このことは，「主語-述語関係」の立場からは，このこととして言われなくなり，「何かが空間においてその居場所から出て行こうとしている」というように捉えられる，つまり，運動として捉えられるのである．同じことが，別様に捉えられる，すなわち，「一緒に起こる」のである．このような関係は，現象と本体，現象と物自体というような関係とは異なるのであり，その違いを理解することが肝要である．ニーチェは，「力への意志」の現象という意味でSymptomという語を用いているのではない．我々が通常，自然科学として理解することが本質的にSymptomであるとニーチェは主張するのである．実際，次のように言われている．

「人はあらゆる運動<alle Bewegungen>，あらゆる『現象』，あらゆる『法則<Gesetze>』を単に或る内奥的な出来事の<eines innerlichen Geschehens>Symptomであるにすぎないと把握しなければならない．」[24)]

ここで「内奥的な出来事」とは「力への意志」を指す．

ここで語られているSymptomとは何を意味するのであろうか．

ニーチェは，その哲学的思索活動の初期からこの語を使っている．この語がどのような意味で使われているかを追っていくと，大体，「表われ」という意味で使用されていることが分かる．風邪の症状（Symptom）とは，風邪が原因でそれの結果として「表われる」現象，たとえば，「熱」が出るなどのようなことを意味する．同様に，ニーチェもまた原因に対して結果として外に表れて来ることがらをSymptomと言っているように思われるのである．ニーチェは，SymptomとともにFolgeという言葉を並べて使っていることもあり，ここから，Symptomとは原因に対する帰結（Folge）のようなものと推察できるのである．しかし，「結果」と言うことができない事情があり，Symptomという語が使われたのである．だから，なぜ，「結果」ではなく，Symptomでなければならなかったのかを明らかにしなければならない．

一般に，因果関係においては，前後関係が根底となる．たとえば，「火のないところに煙は立たない」などと言われるように，煙が出る「前」に火が起きていなければならない．逆の順番は不可能である．つまり，因果関係は，「時」を根底にしている．したがって，「時」の関係を根底にしていない関係性において因果関係的な何かの連関を語ろうとするならば，その連関を原因と結果で語ることに躊躇するのは必然である．このような連関は「力への意志」を原因としてそこから帰結することがらにおいて起こるのである．ゆえに，ニーチェは「力への意志」を原因として起こることをSymptomと言わざるを得なかったのである．このことを裏付けるニーチェ自身の言葉がある．それは次のようなものである．

「すべての物質は，未知なる出来事<Geschehen>のための<für>一種の運動のSymptom<Bewegungssymptom>である．他方また，すべての意識と感情は未知なる何かの<von>Symptomである．我々にこのような二面からそれ自身を理解させようとする世界は，なお多くの他のSymptomを持つことができるであろう．精神と物質の間には何ら必然的な関係は存しない，それは，あたかも，それら両者が，何らかの仕方で表現諸形式を汲みつくして，ただ，表現諸形式を代表しているかのようである．

運動はSymptomであり，思想は同様にSymptomである．欲動が両者の背後にあることが我々に証明され得る．そして，根本欲動<Grundbegierde>は力への意志である．精神それ自体は，運動それ自体と同様，いかなるものでもない．」[25)]

この言葉の中にニーチェのSymptom概念

の本質がよく表れている．ニーチェの思惟の根底にはすでに示されていたように，パトス（ここでは「根本欲動」と言われていること）としての「力への意志」が存する．たとえ，「力への意志」と表立って名づけられる以前であっても，そこにはそれに対応するものが存している．そして，このようなパトスとしての「力への意志」が背後にあって，つまり，それがUrsache（原因というより原事柄）となり，それの「表れ」がSymptomなのである．具体的には，そうしたSymptomは，運動と思想に帰する．運動は「力への意志」のSymptomであり，それも単に「力への意志」のSymptomではなく，「力への意志」のための「（運動という）Symptom」である．これに対して，思想は「力への意志」のSymptomである．

「動く」とは，言葉が*名詞*の言象領域で「言おう」としていることであり，*動詞*の最「外」界で，「*動詞*の」ということが言われようとすることである．ニーチェの立場からは，そのことは，「力への意志」のためのSymptomと捉えられるのである．*名詞*の言象領域は，*動詞*の言象領域の最「外」界であり，したがって，そのような「外」は，*動詞*の「外」であることを表さなければならない．*名詞*に「*動詞*・する」が「兆す」のであり，「*動詞*・する」の徴候が現れる．ニーチェの立場から見るなら，この「（*名詞*領域における）*動詞*の徴候」は，「*動詞*の」ではなく，「力への意志（の）」であり，それのSymptom（徴候的表われ）が，（「動く」ではない）運動の真相ということになる．そして，このような，「力への意志」のSymptom，すなわち，「力への意志」の「徴候的表われ」ないしは「前兆的表われ」という概念は，単に運動の本質規定であるだけでなく，物理学的自然界そのものの本質規定でもある．それは，あらゆる「（自然）現象」，あらゆる「（自然）法則」が「内的出来事」，つまり，根本欲動である「力への意志」のSymptomであると言われていることからも明白である．運動，そして，運動法則の本質は，「力への意志」のSymptomなのである．そして，ニーチェによってこのように自然科学の正体が明らかにされたことによって，自然界そのものが*名詞*の言象領域であることが予言されたと言える．

ところで，物理学的自然界は，*動詞*の最「外」界であり，しかも，「*動詞*の」ということを表さなければならない．ところが，「*動詞*の」は，最「外」界よりも*文法*秩序の上で先行的である．ゆえに，「表す」とは，そのような先行性を表すことである．そうした先行性は，原因が結果の前にあるという関係，いわゆる因果関係ではなく，まだ来ていないことが原因になっていることである．後者は目的的関係と見なされるかもしれないが，ニーチェは，むしろ，そのようには言わずSymptomと言うのである．それは前兆というような関係である．たとえば，風邪の徴候，前兆とは，鼻水が出るとか咳が出始めるというようなことである．風邪の細菌が感染したということが原因でその結果としてそうした前兆的表われが出て来るのであるから，そこには因果関係が存する．しかし，前兆ということは，予兆であり，原因となったことが原因であることが後からその真相を顕わすということを意味する．予兆は「風邪の」予兆である．先の関係，すなわち，*動詞*の最「外」界における「*動詞*の」と「外」との関係は，ここで徴候と言われたことの関係性とまったく同一ではない．たしかに，「*動詞*」が原因になって最「外」界が結果している．そこには因果関係が存するように見えるかもしれない．しかし，そこに存する関係は，*文法*上の関係性であり，「時」的ではない関係なのである．細菌が感染してその後で，つまり，時間的に後で症状が起こるという関係ではない．そして，「外」はなるほど「*動詞*の」を予兆していると言えるが，もともとの原因を原因として顕わすわけでも

ないのである．ニーチェのSymptomもまた単なる因果関係における帰結という意味をもつのではなく，*文法*秩序的な面を表そうとしているのである．つまり，Symptomという言い方は，ニーチェの自然科学論そのものの境位を表現しているのである．まだ真には言象学的文法論的に物理学的自然界が捉えられていない立場に立っていることをそれは表現しているのである．しかし，そのような立場から*動詞*の最「外」界の光景が眺められているがゆえに，Symptomは唯一的に厳密な意味をもつことも明らかとなる．Symptomとは，*動詞*の最「外」界における「*動詞*の」と「外」との*文法*的関係性を，*文法*論にまだ到達していない途中的立場から眺めて表しているのである．その意味では，Symptomは，「力への意志」のSymptomと言われるのももっともであるということになる．

言葉が*名詞*の言象領域で「言おう」としていること（*名詞の格変化*）は，言象学的文法論的ことがらである．ニーチェの哲学のエレメントは，まだ，このようになっていることを認識できる立場ではない．しかし，「言おう」としていることは，意志として，「言葉が」ということは，支配するものとして把握されているのである．ゆえに，「言葉が言おう」としていることは，ニーチェの立場からは「力への意志」として捉えられている（それの徴候ではあるが）．これに伴って，「*名詞*」は，「絶対空間」として信じられているのである．このような「絶対空間」における「力への意志」のSymptomは，当然，「動く」ことではあるが，「動く」とはまだ認識されていないために，運動と言われ，それは，「見える世界」に「翻訳」されると，「何かが空間内を動くこと」として，つまり，何かの運動として捉えられる．これが，物理学的自然界である．物理学を意志から説明しようとすることは，観念論にしてロマン主義的ごまかしであると自然科学者からは批判されるかもしれない．しかし，ニーチェの見ていることは，けっしてそのような類のものではない．運動を「力への意志」のSymptomと捉えることは，自然科学よりもっと自然科学的なのである．この命題は絶対的に反駁できない命題である．なぜなら，この命題の奥深くで，*名詞*が*動詞*の最「外」界であることが語られているからである．

ところで，「絶対空間」内の「力への意志」はKraft（力）と言われている．では，Kraftと運動はどのような関係にあるのであろうか．

最初に，「力への意志」とKraftとの関係がどのようなものかをニーチェ自身の言葉によって確認しておきたい．

「Kraftという無敵の概念は，それによって現代の物理学者が神と世界を創り上げたものであるが，それは，なお或る補足を必要としている．Kraftという概念には或る内奥の意志があることを認めてやらなければならない．この意志を私は，『力への意志』と表したのである．すなわち，力（Macht）を表し示すことへの飽くことなき要求，あるいは，力の使用と実行への飽くなき要求として，創造的な衝動<schöpferischen Trieb>などとして表したのである．」[26)]

Kraftの内奥には「力への意志」が存すると言われている．このことを言象学的文法論的に解明する．

言葉は，言葉そのものとしては，「主語-述語関係」から脱出しようとしている，その関係の中から出て来て，「言おう」としている，すなわち，論理領域から言象領域に入ろうとしている．これは，最初の段階としては，「*動詞*・する」が「有る」という動詞において「*動詞*・する」ことをし始めることであり，「有るもの」の領域全体を否定しようとする「対抗運動」である．この境界をその哲学のエレメントにしている哲学がニーチェ哲学である．そのエレメント内では，まだ，「言葉が言おうとしている」ということはそのことと

して認識されていない．「言おう」は，それがそこから脱出しようとしている「主語-述語関係」との関係にあり（否定するという関係），或る「創造的な衝動」として，「Machtを表そうとする要求」として，まだ「述語」的に捉えられているのである．Machtは，まだἐνέργειαそれ自身ではなく，何らかの仕方でδύναμις性をもっているのである．これを「表そう」とすることが「力への意志」である．このような意味の「力への意志」がKraftの「内奥」に存するとニーチェは語っているわけである．すでに示されたように，「門外領域」は，「主語-述語関係」の外部の領域であり，そこにも「言おう」とする言葉の動向が前兆的に表われる．それは，「動く」ことと言われるのであるが，「力への意志」の立場から見ると，「力への意志」の徴候，すなわち，Symptomである．ゆえに，ニーチェ的には，運動は，本質的に，「力への意志」のSymptomと言われる．しかし，また，「動く」ことは，ニーチェ的には，絶対空間に「力への意志」の徴候が表われることとしてKraftとも言われる．なぜなら，Kraftは絶対空間を「基体」としていると言われるからである．つまり，ニーチェの立場から見られるならば，運動とKraftとの区別が厳格にされることができないはずである．ニーチェはまだ「動く」ということを知らないために，それをその内奥に「力への意志」を内在させているKraftと捉え，また，「力への意志」のSymptomとしての運動と見なす可能性があることが分かる．

ゆえに，「力への意志」の哲学においては，自然界は，Kraftないしは「力への意志」のSymptomの世界と見なされるのであり，「動く」ということの真相はそこではまだ認識されないということになる．「動く」ということは，*名詞*の領域で，言葉が「言おう」としていることであるから，言葉のこのような振る舞いを知らないニーチェの立場からは，そのことがまだ知られないのである．「動く」をまだ知らないニーチェ哲学の立場では，上のように，Kraftと運動とは区別できないはずである．ところが，ニーチェ哲学においては，運動は，Kraftを基礎にして理解されていると言えるのである．このことを，ニーチェ自身の言明から確認しておく．

「度と力の諸関係 <Grad- und Kraftverhältnissen>を確定することとしての，闘争・・・としての，あらゆる出来事，あらゆる運動，あらゆる生成」[27]

この引用文からは，運動はKraftと区別されているように思える．

したがって，ニーチェの哲学において，物理学的自然の世界は，本質的には「力への意志」を内奥に秘めたKraftという基本概念によって統一的に捉えられるのである．この基本概念は，物理学のいわゆる「力」の概念とは異なるものであることに留意すべきである．その概念は言象学的文法論の*名詞の格変化*により近づいているという意味をもつのである．

Kraftについては，次のように言われてもいる．

「どのKraftの中心も残りの全体に対してそれの遠近法（Perspektiv）を，すなわち，それのまったく特定の価値評価，それの作用の仕方，それの抵抗の仕方をもっている．」[28]

「力への意志」は，「（言葉が）言おう」とすることであるが，「主語-述語関係」からの脱出という境位における「言おう」とすることとして，「まだなお（言葉がではない）」という面をもつ．「言おう」は，したがって，「力への意志」の境位からは，「意志」と見えるのである．何が「言おう」としているかというと，「言葉が」であるが，言葉とはまだ見えない．では，何が意志していると見えるのだろうか．創造的な何かが「言おう」としているのである．ある支配するもの，Macht（これは言象学的文法論的には，「*動詞*・する」ということ）が自身を表そうとしてい

る，このようにそこでは見えるのである．したがって，「力への意志」は，「主語-述語関係」に関係している限り，その関係の中に自身を創作し入れ，言葉的創作としては，詩作（dichten）し入れようとしている．或る真理ならざるもの，創作的に見える何かをその関係の中に入れ込んで，真理を否定しようとするのである．ゆえに，上のように規定されたKraftという基本概念もまた極めて厳密に考えられるならば，或る創作，或る虚偽が空間の中に兆すことということになる．「力への意志」が「主語-述語関係」に関係するとは，その中で詩作すること，「（虚-言的に）言おう」とすること，であり，Kraftもまたそのような本性をもつのである．「主語-述語関係」に関係することによって，さまざまな詩作が可能となる．その中でどう「言おう」とするかは，「主語-述語関係」との関係性によって異なる．さまざまな詩人（「力への意志」）が詩作しようとする．これがここで「遠近法」と言われていることである．自分流に世界を仕立てたいのである．同様に，Kraftの中心は，それ特有の作用と抵抗の仕方をもつと言われているのである．「主語-述語関係」との関係性において「（虚-言的に言葉が）言おう」とすること，その中で詩作することは，こうこうとして詩作するという詩人独特の観点をもつ．そのように，Kraftもまた，こうこうと「言おう」とするのである．そこには，詩人的解釈が存する．詩作することは，「言おう」とすることとして深い意味で，「意味あること」であり，価値の観点がそこに必然的となるのである．入れ込んだ詩作に価値を見出すのである．ゆえに，Kraftとは，本来的に詩作である．このように，Kraftを理解するとき，次のニーチェの言葉もまたその意味が明瞭になる．

「あらゆる運動は，身振り<Gebärden>として理解されるべきである，ある種の言葉として．それによって，諸Kraftはお互いに理解し合うのである．」[29)]

ここでは，Kraftがあたかも人間のように捉えられている．人間同志が，お互いに身振りという一種の言葉で理解し合うように，Kraft同志もまた運動という身振り言語で理解し合えるというように表されている．つまり，ここには擬人法のような表現が使用されているように見える．しかし，本当に，比喩的に表現されているのであろうか．それとも，Kraftとは事実，運動という言語で相互に「理解し合っている」のであろうか．

確実なことは，ニーチェは，すでに明確にされたように，Kraftを単に物理学的な「力」とは捉えていないということ，少なくとも，それを，或る意志を秘めていることとして捉えているということである．ゆえに，「理解し合う」ということは，単なる比喩，人間的な比喩ではないと考えるべきである．

さて，運動は，すでに考察されたように，ニーチェの哲学的エレメントからは，その真相が見通せない．Kraftとの明確な区別が原理的にできなくなっている．なぜなら，運動の真相，つまり，「動く」ということは，言葉が*名詞*の領域で「言おう」とすること，*名詞の格変化*であるからである．ニーチェの立場からは，この「言葉が言おう」としていることがまだそのようなこととして捉えきれていないのである．それは「力への意志」の様相，「力への意志」のSymptomというように見えているにすぎない．ゆえに「動く」ことは，「力への意志」の立場からはまだ不可解であることになる．「力への意志」を内奥に抱くKraftの奥底に「動く」ということが存している．この「動く」は，「言葉が言おう」としていることであり，諸Kraft同志を一つにしている或る隠れた原理であることになる．これによって，諸Kraftは，相互に真に「理解し合える」のである．それらは，本来は「（言葉が）言おう」としていることであるのだから，それによって（「動く」によって）相互に「分

かり合える」のである．「身振り」は，ある種の外面的な言葉であり，*名詞*の中で「言おう」とすることに対応している．運動とは本来は何かということが，Kraftという基本概念に拠って，上記のニーチェの言葉の中で語られているのである．我々が物理学的な力として考えている重力とか電磁気力は，運動を通して相互に理解し合っているのである．運動する素粒子によって，力が媒介されるということではない．運動は非常に深い意味である種の言葉なのである．この洞察は，あのアリストテレスによる「動く」ことの定義と共鳴しあう．

このように，諸Kraftがある種の言葉としての運動を通して相互に理解し合うということは，比喩的な表現ではなく，その通りであること，事実と受け取られなければならない．ニーチェの洞察は，最も深く真実な自然認識なのである．物理学の発展深化もここに至らなければならない．あらゆる物理学的力，すなわち，本来的には，Kraftには意志が存するのであり，この意志は，主観的なものではなく，「言おう」とすること，そして，*名詞*の領域では，それは「動く」であること，このようなことが，ニーチェ哲学の視界に入って来たのである．それの表現が上の遺稿断片に他ならない．Kraftの詩人的性格は，その作品において相互に共鳴しあえるに違いない．なぜなら，その作品の奥には同一のこと，「言葉が言おう」としていることが存するからである．

言象学的文法論的には，「動く」ということは，一義的に決まる，すなわち，*名詞*の領域で言葉が「言おう」として，「主語-述語関係」の述語付けとは逆方向に向かうこと，したがって，自らの居場所の外へと出て行くことである．そこには，厳密には，Kraftということは認められない．言葉が「言おう」とすることが，「*動詞*・する」の或る「する」ことと見るならば，言葉が「言おう」とすることは，最「外」界でのエネルゲイアとも見なされうるから，それはエネルギーとも言えるかもしれない．しかし，そこにはKraftはない．しかし，ニーチェの立場は，言葉がようやく「主語-述語関係」関係から脱出しようとしているところであるので，「動く」の上記の一義的定義とは異なって見えるのである．「動く」ことは「力への意志」を基礎にして捉えられるのである．つまり，Kraftから運動の本質が規定されるというようになる．諸Kraftがそれでもって相互に通じ合えるある種の言葉が運動なのである．このことは，諸Kraftの根底に言葉が「言おう」としているということが存するということを言っているのである．諸Kraftは運動そのものである「動く」において自身を理解できるのである．そして，自身を理解することで相互に理解し合えるのである．

このように，Kraftと運動の関係そのものがニーチェの哲学においてのみ有り，また，その本質が明かされている．しかし，自然科学，特に，物理学でも力と運動の関係が有るのはなぜなのであろうか．

自然科学者は，ニーチェの哲学の境位に至ることはできない．もし，出来るとしたならば，彼らは自然科学の立場を放棄しなければならないからである．すなわち，物理的自然現象を「未知なる出来事のためのSymptom」と把握しなければならない．自然科学者が居住する境位は，「主語-述語関係」の内部なのである．ニーチェの立場は，そこから脱出しようとしている立場である．この立場において，はじめてKraftと運動の関係が「有る」ようになっているのである（「力への意志」の境位を更に言葉の方へ向かうと，Kraftは「動く」ことに還元されるのであるから，Kraftはニーチェ哲学の境位でのみ見うけられるのである）．では，なぜ，自然科学者もまた「力」と運動を有るとみなすのであろうか．彼らは，「主語-述語関係」内部に居るた

めに，Kraftと運動の本来的関係，つまり，ニーチェの哲学だけが見ているその本質的関係を，主語的に捉えるのである．つまり，簡単に言うなら，力と運動に主体を仮構するのである．たとえば，引力という力で引き合う物，地球と太陽が有ると見なし，電子が運動していると見なすのである．運動とKraftの両者が有るようになっているニーチェの哲学的境位は，このような「何かが」という主語的捉え方から脱出しようとしているのである．何かが何かへ働きかけているという形でKraftと運動が捉えられているのではない．ニーチェの立場においては，運動とKraftがはじめて有るようになっていて，したがって，両者の関係が自然の本質規定として理解されている．ところが，この関係にまでまだ至っていない「主語-述語関係」内部に居る思惟には，主語が必ず伴う．要するに，そのような思惟は，自然の本質を誤解していることになる．何かが運動しているというように思惟する立場にはまだKraftと運動の本質関係が顕れていないのである．引き合う何か，排斥し合う何かが有る限り，そこに自然の本質が顕わになる可能性はない．光子が有り，マイナスの電荷をもつ電子が有るかぎり，Kraftと運動の関係は永遠に不明のままになるのである．「主語-述語関係」から脱出しようとする「門」が開かれているところに，ようやく，Kraftと運動が有るように「成る」のであり，その関係が明かされ，かくして，自然の本質が明るくなってくるのである．

こういうと，科学者は，地球が有るのは確かではないかと憤慨するかもしれない．地球と太陽の間に引力という力が働くのは絶対疑うことはできない，現にあなたも地球の上に居るではないかと言うであろう．しかし，このように常識に訴える主張は，自然の本質規定を思索しようとする真摯な態度ではない．かつて，エレア学派は，運動は有りえないと主張した．これに対して，そう主張する君の口は上下に運動しているではないかと反論するにも似ている．常識では絶対に理解できない自然の本質を明らかにしようとする真剣な態度が学問を志す者には大切なのである．ニーチェの哲学もまたそのような真剣な思索において見えてきたことがらであり，それを常識から疑うのは誤っている．

§6　アトム論

前節で明らかになったように，ニーチェの哲学のエレメントから見るならば，自然界は，Kraftに基づいて理解される．そして，Kraftとは，その内奥に「力への意志」が有ると認められるものであり，物理学的な意味での「力」とは異なる．言象学的文法論的には，*名詞*の領域で言葉が「言おう」としていること，すなわち，*名詞の格変化*が，「動く」ことである．言葉が「言おう」としていることは，ニーチェの立場からは「力への意志」として捉えられている．ゆえに，「動く」ということがらは，ニーチェの立場からは，「動く」そのものとしては捉えきれず，Kraftとして捉えられるのである．まだ正しく捉えられていない「動く」は，それを通して諸Kraftが相互に理解でき得る身振り言語のようなものとして，つまり，運動として理解されることになる．このような運動とKraftの関係が，それら両者の本質規定となるのである．

したがって，運動ならびに物理学的な力の本質規定は，Kraftと運動の関係として，唯一，ニーチェ哲学の視界の開かれの中で可能となると言える．どのような物理学も運動と力のこのような本質規定をすることはできない．

ニーチェ哲学のエレメントは，すでに示されたように，「主語-述語関係」から言葉が脱出しようとしていることである．したがって，ニーチェ哲学の視界の中で見えている運動とKraftの両者の関係を基盤にして，「主語-述語関係」内部で運動とか力という概念が用いられていることになる．「主語-述語関係」内

部では，主語が立てられていて，これが運動したり，作用されたり，作用したりするのである．一般に物理学という学問は，このような基礎の上に成立している．その学問は,「主語-述語関係」を脱出しようなどとは夢にも考えないのである．物理学においては,「主語が立てられている」ということこのことがそれとしては全く認識されていない．この学問にとって主語は，総じて「原子」として，アトムとして捉えられるのである.ここでは，アトムは，その語源的意味にしたがって「それ以上分割できないもの」を意味するものとする．或る種の点粒子一般をここでは総じてアトムと名付ける．現代物理学における素粒子もまたここではアトムと見なす．基本的には，それは，主語，Subjekt（主語であり，主体である）である.「主語-述語関係」内部で，運動と力は，それらの本質が認識されず，何か主語的なものが運動していると間違えられているのである．なぜなら，運動も力も,「主語-述語関係」から脱出しようとしているところにその真相が見えてくるのであるから，まだそこから脱出できないところでは，正しく理解されていないからである．このような「間違った理解」が「アトムが運動している」ということそのことなのである．要するにアトムが運動し，アトムに力が加わるというようなことは，そのことが事実起きているのではなく,「間違い」であるということである．運動と力の真相が覆われていること，このことが,「アトムが運動する」といういわゆる事実を生じさせているのである．

今，上で述べられたことの確認のために，アトムというものがまったく実在しないものであることを断言しているニーチェ自身の言葉を次に示す．

「最終的に我々は次のことを把握する，すなわち，諸々の物は，したがって，アトムもまた，いかなる働きもしない．なぜなら，それらはまったく存在しないからである（weil sie gar nicht da sind）.」[30]

太陽も地球も「諸々の物」に属している．太陽は地球に引力という作用を及ぼす，こう学校では教えられたのであるが，それは，間違いであったのである．水素原子２個と酸素原子１個から水分子が出来ている，これも．まったくのでたらめである，こうニーチェは主張すると言えよう．なぜなら,「それらはまったく存在しない」からである．このようなニーチェの「極端な」主張は，しかし，単なる独断的，主観的意見と見るのは完全な誤りである．ニーチェ自身,「最終的に（endlich）我々は把握する（begreifen）」というように慎重な言い方をしていることからもそう言えるのである．また，ここで語られていることは，ニーチェの立場からはそう見えるに過ぎないということでもないのである．

我々人間存在が,（言葉が）「主語-述語関係」から脱出しつつあるという実状を理解することほど至難なことはないのである．すでに，引用されたニーチェの言葉をここで再び挙げることにしよう．

「判断すること（das Urteilen）は我々の最古の信仰である」[31]

「判断すること」，つまり，言葉が「主語-述語関係」に根源的に分かれることは，人間存在のもっとも過去的なできごとなのである．この関係から言葉が脱出しようとすることもまた，最古にして最後のことがらに属するのである．このようなことが主観的で独断的なことがらであるとは決して言えない．人間存在そのものの最古の信仰から脱出せんとすることがどうして独断的なことであろうか．逆なのである．今上で述べられたことを単なる狂気の哲学者の世迷言と見なす人間存在自身が巨大な誤りの中に世迷言しているのである．誰でも地球も太陽も存在しないとは思わない．しかし，実は地球も太陽も存在しないのである．人間存在は,「主語-述語関係」の内部にあるために，どうしても，主語を否

定することができない．しかし，この関係はまさに，最古の信仰なのである．こう見ることが可能なのは，唯一，ニーチェ哲学のエレメントが，「主語-述語関係」から脱出せんとしているからである．最古の信仰の闇を照らす光が射しているからである．

以上のように，ニーチェ哲学の視界には，アトムは実在しない(物は無い)．しかし,「主語-述語関係」内部，つまり，「最古の信仰」の中では，主語を立てざるを得ず，ゆえに，或る主語的な何かが運動し，主語的な何かが働き，主語的な何かに力が作用する．

すでに示されたように，「動く」ということは，*名詞*の領域で言葉が「言おう」とすることである（*名詞の格変化*である）．*名詞*の領域は，「主語-述語関係」の「門外領域」である．「主語-述語関係」そのものは，この関係で言葉が「言おう」としていることに他ならない．したがって,「主語-述語関係」の「外」で言葉が「言おう」とすることは，或る意味で述語付けること（の兆し）である．*名詞の格変化*が起こり，*動詞*が「兆す」のである．*動詞*が*名詞*において「前兆」することが,「動く」ことである．それゆえ，「動く」が一種の述語であるとすれば，それの主語となるものが「主語-述語関係」からは考えられ得ることになる．言葉が「言おう」というのだから，このような主語的なものは「言葉」ではないかと思われるかもしれない．しかし，言葉そのものは,「主語-述語関係」から脱出しようとしているのであり，したがって，主語になることは有りえないのである．では,「動く」が前兆的な述語として捉えられるとき，それの前兆的な主語はどのようなものになるのだろうか．形式的には，言葉が自身を「言おう」としているのだから，それは，少なくとも，自己的なものであることになる．ところが，自己自身に成ろうとしているそのものは自己から離れ行くものなのである．つまり，このような主語的なものは矛盾的自己同一的なものということになる．「動く」という述語の主語は矛盾的自己同一的な「何か」であることになる．それ自身であってそれ自身ではないもの，それは，自己矛盾的な点的なものなのである．点であって点ではないものである。なぜなら，点は，点としてそれ自身でなければならないけれども，同時に，自ら空間性をもち，自身ではなくなっているからである．

「動く」ところの前兆的な主語的な何かは，このように，本質的に矛盾的な「点」的である．「点」でありながら，それでないものということになる．それは大きさを持たないと見れば「モナド」であり，或る大きさをもつと見れば「不可分割者」としてアトムである．このような事情をニーチェは次のように表現している．

「我々は，何ゆえに何かが変化したのかを説明するために，物を探し求める．アトムですらこのようにして憶測された(hinzugedacht)『物』であり，『原主語(Ursubjekt)』であり，・・・」[32)]

ここで言われている「原主語」は，「原主観ないし原主体」とも訳されてもよいが，非常に深い意味での「原主語」と理解されるべきである．ニーチェの哲学のエレメントがそこから脱出しようとしている「主語-述語関係」の中では，運動を含めた「変化」の中に「原主語」を立てるという必然が存するのである．「原」，Urという語は，「主語-述語関係」の中で遂行されている「(主語を立てる=物を探し求める）憶測」がそこから脱出しようとしている立場から見抜かれていることを伝えているのである．

アトムが憶測されるということは，すでに，「主語-述語関係」の中に居ることである．ニーチェの立場は，「主語-述語関係」から言葉が脱出しようとしている段階(ただし,「言葉が」ということはまだ認識されていないために，或る「根本欲動<Grundbegierde>」として，

「力への意志」として捉えられている）である．そして，ニーチェの立場においてはじめて運動と力とが本質的に運動とKraftの関係として捉えられ得るようになる．ゆえに，アトムが憶測されている限り，力と運動の本質規定（「力への意志」のSympyomであるという規定）は覆われたままになる．ここから分かることは，素粒子などのアトム的な実在が信じられている場合には，運動と力の本質は知られないということになる．逆に，運動と力の本質規定に思考が迫ると，アトム的実在が或る矛盾性を露呈するようになる．アトムと運動と力とのこのような相互的関係成立の本質は，「主語-述語関係」から言葉が脱出しようとしているというところに存するのであり，ニーチェ哲学の内容に存するのである．「力への意志」を基礎にして物理学という学的建築物が建てられているのである．

以上のことをニーチェ自身の発言から確認しておきたい．以下に引用されるニーチェの言葉において，ニーチェの自然科学論の基盤がKraftであること，そして，この他にはアトムというような物が存在しないことが明瞭に示されている．

「機械論的世界は，眼と触覚が唯一的に（「運動する」として）一つの世界をみずからに表象するとおりに空想されているのである．-そのようにして，世界は算定されることができる- このような空想の結果，原因的な諸単位が虚構される，すなわち，「物」（アトム）が虚構される．そして，それらのアトム的な物の作用が恒常的となる（まやかしの主語概念がアトム概念へと移転される）

かくして，現象的であるとは，次のようなことなのである，すなわち，数概念と物概念（これは主語概念である），そして，活動概念（これは原因であることと作用を分けることである），並びに運動概念（これは視覚と触覚）を混ぜて一つにすることである．我々は我々の視覚，我々の心理学を常にその中に持つ．

もし，我々がこうした添加物を除去すれば，いかなる物も残らず，あらゆる他の力学的量との緊張関係にある，力学的量が残る．力学的量の本質は，あらゆる他の量へのそれの関係に存する，つまり，あらゆる他の量へのそれの「作用」に存する．」[33]

「運動」は，ニーチェによれば，ここで「力学的量（作用）」とよばれていること（「力への意志」量とも呼ばれる）を「或る見える世界（eine sichtbare Welt）」に移し変えること（Übersetzung=翻訳）である[34]．運動は，それを通じて諸Kraftが相互に理解し合えるようになるある種の言語として規定されていたのに，どうして，ここでは，「見える世界への移し変え」と別様に言われるのであろうか．

すでに明らかになったように，ニーチェの立場では，「動く」の言象学的文法論的真相が捉えられていない．*名詞*の領域で言葉が「言おう」とすることは，まだ，「力への意志」のSymptomとして捉えられているのである．*動詞*は，*名詞*において「前兆」的になっているのであるが，「*動詞*」自身が知られず，それが「力への意志」と見えている立場からは，その「前兆」は，「力への意志」のSymtomと見なされるのである．しかし，そのような「力への意志」のSymptomである運動も，「動く」を根底にしている以上，「ある種の言葉」であるとは理解されているのである．諸Kraftは，本来的には作用であり，力学的量であり，それらは，「力への意志」を本質としている．「力への意志」は，「主語-述語関係」から言葉が脱出しようとしていることであるので，まだ「主語-述語関係」との関係性を完全になくしていない．Kraftとか「作用」とかは，このような事情を表している（それらはまだ述語的である）．「動く」ということはニーチェの立場ではそれとしては言われず，Kraftとされ，他方でそれは，「主語-述語関係」の中に「移し変えられ」，「翻訳」さ

れた運動と捉えられる．こうして，ニーチェにおいて，運動は，Kraftが相互に理解し合う言語であるとともに，翻訳とも言われるのである．「ある見える世界」ということでニーチェが言おうとしているのは，この「主語-述語関係」のことである．「ある見える世界への翻訳」とは，「主語-述語関係」への「翻訳」ということである．なぜなら，「主語-述語関係」において，対象が「見える」ようになるからである．

そして，「動く」ことが，「主語-述語関係」に翻訳されると，そこに主語がどうしても立てられることになり，これが「原因的な単位」として虚構されるのである．ここに運動するアトムということが虚構される．

「主語-述語関係」から言葉が脱出しようとしているニーチェの哲学的エレメントにおいては，すなわち，「力への意志」の立場においては，まだ「述語」との関係が残っているのであるから（「否定」的ないしはニヒリズムであるから），言葉が「主語-述語関係」から脱出して「言おう」とすることは，まだなお「述語」され得る．それは，「作用（Wirken）」と言われ，力学的量の諸関係というように述語されるのである．基本的にこのような事柄はKraftの関係と言い得る．「作用」は，「力への意志」から明らかにされるのである．こうして，次のような決定的な発言がされることになる．

「力への意志は，『有る』でもなく，生成でもなく，パトスであり，― もっとも基本的な事実であり，そこからはじめて生成，作用（ein Wirken）が生ずる．」[35)]

以上，物理学のすべての基礎概念が「力への意志」に基づくことが明らかにされた．

さて，上述のように，*名詞の格変化*である「動く」ということは，「力への意志」的自然科学論からは，それとしては認識されず，Kraftとして，また運動として捉えられる．そこには，主語の前兆的生成も可能となり，点粒子の運動の矛盾性が出て来るようになる．点粒子の運動は，Kraftと区別されず，「力への意志」の立場からは，「動く」の同一的な二つの捉え方となっている．このことが，物理学的には量子論（量子力学）を基礎づけるのである．ニーチェの自然科学論の本質から量子論が可能になる．以下，このことを更に詳しく考察する．

§7　量子論とニーチェの自然科学論

ニーチェの自然科学論の基盤はKraftである．Kraftは，「力への意志」を内奥に潜めていることとして，したがって，述語性を完全には脱していないこととして，「作用すること・働くこと（Wirken）」であり，これは「力学的量」の本質である．「力学的量」とは，主語的なものを除去して残るもの，つまり，本質的に述語的なものであるからである．ニーチェ哲学の基礎となっているエレメントは，「主語-述語関係」から言葉が脱出しようとしている場面であり，いわば「超越的述語」が現れようとしている境位である．述語が言葉そのものへと超越されようとしていることは，述語が無くなることであると考えるべきではない．述語を超えて「（言葉そのものが）言おう」としている境位は，「主語-述語関係」との関係をまだ残しているのであり，したがって，そのことも述語として語られ得るのである．「力への意志」がこのように「超越的述語」的に述語されることが，*名詞の格変化*を捉える仕方となると，「動く」ということが超越的述語的に述語され，「作用」と言われる．このような意味の「作用」が「力への意志」から生じると言われているのは，以上のような理に基づく．

「主語-述語関係」の門外は，*名詞*の言象領域である．「主語-述語関係」から脱出した言葉は，*文法*領域に入ることができ，*動詞*の領域の最「外」界としての*名詞*の領域を*文法*的視点から見通せるようになる．しかし，「主

語-述語関係」内部から見るなら，「主語-述語関係」の門外領域は*名詞*の領域とは絶対的に理解されない．*名詞*の領域は，或る主語的な単位が，原主語が，そこで運動しているところとして，つまり，空間として理解されるのである．しかし，ニーチェの立場からは，なるほど*名詞*の領域は，*名詞*の領域とはまだ捉えられないけれども，それに近いことがらとして，（Kraftの基体として）「絶対空間」として眺められているのである．すでに述べたように，「私は絶対空間を信ずる」という言い方がこのような事情を表現している．

*名詞*の領域で言葉が「言おう」としていること，すなわち，*名詞の格変化*が「動く」ということである（初めて*名詞*の中に*動詞*が兆すこと=*Zeit-wort*が兆し，「時間」が見え出すこと）．このことは，*文法*的視点からの*文法*的眺めである．ニーチェの哲学的立場においては，まだ，この光景は視界に入ってこない．しかし，ニーチェ哲学のエレメントは，言葉が「主語-述語関係」から脱出しようとしている境位であるのだから，「動く」ことは，「絶対空間」における「力への意志」の徴候的な表われとして，Symptomとして捉えられることになる．「絶対空間」における「力への意志」量としてそれは捉えられるのである．それは，本質的に超越的述語的なもの，広い意味での「作用」である．しかし，ニーチェの立場からはそう眺められることは，「主語-述語関係」側から見ると，主語的な単位なくしては理解されない．ゆえに，「力への意志」量（力学的量）ないしは「作用」は，物理学的概念ではなく，「力への意志」に属する概念，言象学的文法論的に近づいている特別の概念なのである．

かくして，物理学は，二つの矛盾する論理に直面する可能性をもつ．それが，「主語-述語関係」内に留まる限り，つまり，「最古の信仰」に疑いを持たない限り，主語的単位を除去することはできず，何かアトム的な実在が空間において運動すると見なければならない．しかし，ニーチェが見たことがらの真相からすれば，アトム的なものが運動するとは，「作用」間の相互関係として捉えられなくてはならないのである．主語的単位の運動は，Kraftの関係とまったく同一のことになる．

ここで，主語的な単位を「（単）子」と表し，「力への意志」量を「量」と表せば，「動く」ということは，「主語-述語関係」側から，「量・子」的と捉えられ得る可能性が出て来ることになる．「主語-述語関係」側には，もちろん，ニーチェが見ている「力への意志」量，あるいは，「力学的量」，Kraftは知られていない．しかし，ニーチェの哲学が見ているものは，単にニーチェという個人が見たものではなく，すでに，示されたように，歴史的なことがらであるとすれば，「主語-述語関係」側にも，ニーチェが見ている「力への意志」量に対応することが何らかの仕方で歴史的に出て来るべきなのである．現代物理学の基本概念としての量子とはこのようなものと見なければならない．粒子であって波動であるという実在の有り方は，「動く」という*文法*的なことがらが「力への意志」量として捉えられ，同時に「動く」ことがアトムが運動することとして見える世界に翻訳されているというところに基礎付けられているのである．ゆえに，量子論そのものが，人間存在に「最古の信仰」から脱出するようにという呼びかけをしていることになる．この信仰に疑いなく安らいでいる間は，「何かの物が運動する」でよかったのであるが，ニーチェの哲学が歴史的に出現するとともに，いわば予定調和的に，主語的な単位の運動が，その単位の無い「作用」であることが告げられるようになる．量子論は「最古の信仰」を動揺させるものなのである．この「動揺」は，「動く」の*文法*論的真相に向かうための或る道程であり，歴史的必然的出来事であると評価される．なお，ここで言われたことは，量子論とニーチェの哲学

とを無理やり繋げようという意図からいわば捏造されたのではなく，ことがらの真実から必然的に導かれた帰結であることに注意してもらいたい．あえて筆者は言うが，ここで語られていることは軽率な判断とか評価をしてはならない重大な内容なのである．

ここまで解明されたように，ニーチェの自然科学論においては，言象学的文法論的な意味での「動く」ことは「動く」こととしては認識されていない．それは，「力への意志」の徴候的な表われとして捉えられていて，また，それが「主語-述語関係」領域に「翻訳」されて「運動」と見なされている．同一の「動く」ということがKraftと運動に分かれるのである．このような二分化が物理学において量子論として登場してくるのである．

ところで，主語的な単位について，ニーチェは次のように語っている．

「我々は計算するために『単位』を必要とする．それゆえに，単位が存在すると推測されるべきではない．我々は単位という概念を我々の『自我』概念から借りてきたのである．－我々の最古の信仰箇条から借りてきたのである．」[36]

アトムは，「単位」である．それは，「主語-述語関係」における主語ではなかったのか．なぜ，ここでは，「自我」概念なのであろうか．

「自我」とはニーチェにおいてはどのようなものとして理解されているのであろうか．

「思惟することによって自我が定立される．しかし，これまで，人は大衆のように『私は思惟する』の中に直接確かな何かが存すると信じたのであり，この『自我』が思惟することの与えられた原因であり，これの類比によって我々はその他のすべての因果関係を理解していると信じたのである．」[37]

思惟するということに対して，「働く原因者」を定立する，そして，この原因者がここでは「自我」とされるのである．つまり，「私」が思惟しているのだ，と信じたのである．

ここから，更にニーチェは，「自我」定立の奥深くに隠されているより根本的なことを見出す．それは，次のように語られている．

「思惟されるとき，思惟する何かが存在しなければならないということは，単純に我々の文法的習慣の公式化であり，この習慣はすることにする者を措定するのである．」[38]

思惟するということに対してその原因者を立てるということで「自我」が立てられるのであるが，このことはもっと根本的に「文法的習慣」に依ると考えられていることが分かる．つまり，「自我」とは，「最古の信仰」としての「主語-述語関係」に基づいて可能になっているのである．本来，思惟するということ，「主語-述語関係」において述語付けるということは，言葉がこの関係から脱出しようしていることであり，その意味では，思惟の奥に「力への意志」が存する．思惟することは，「力への意志」の或るSymptomなのである．それは純粋に一種の働きであるのに，そこに「働く」何かを持ち込むのである．「力への意志」が把握されていない場合，「何かが働く」と「主語-述語関係」内で語るほかないわけである．この「何か」が「自我」である．ゆえに，「自我」そのものが文法的習慣によっているのである．「自我」によって「主語-述語関係」が成立しているのではなく，その逆になっているのである．

ゆえに，アトムとか単位は「自我」概念から借りてきたということは，より深いところから見るなら，「主語-述語関係」における主語から借りてきたということである．つまり，単位とかアトムは，主語的単位なのである．アトム概念の根底には，主語的単位が存し，それは，「自我」からの借用とも言い得るのである．それゆえ，「主語-述語関係」が「最古の信仰」とすれば，「自我」は，そのような「最古の信仰」にしたがって規定される「信仰箇条」と呼ばれるのである．アトム論のもっとも根底深くには「文法」的なことが

横たわっているのであり，ニーチェはこのことに気づいていたと言える．この「文法」的なことは，本来的には*文法*的なことなのである．ここから，「力への意志」，すなわち，「根本欲動」である純粋な働きは，「文法」に関係していることが，つまり，*文法*に関係していることが明らかとなる．

*名詞*の領域内で言葉が「言おう」とすることは，「力への意志」のある種の外的様態であるから，それは「力への意志」量というように捉えられ得る．これは，「主語-述語関係」側からは，何かの主語的単位が，運動することとして見える．この「主語的単位が運動する」ということが，自然の本質ということになる．しかし，この命題は，元々は，*名詞*の領域内で言葉が言おうとすることであるから，「力への意志」量ということがその命題の真相であることになる．こちらは，ニーチェ哲学の視界において見えてくることであり，「主語-述語関係」内部からはまったく理解できぬことである．なぜなら，主語を定立せずには，思惟は不可能であるからである．量子論は，この間の消息を明らかにしている．つまり，「主語的単位が運動する」という命題の真相である「力への意志」量を粒子にして波動ということとして数学的に捉えるのが量子論なのである．「粒子として」理解するには，「主語-述語関係」内部でことがらを見るのでなければならない．それは，一般に「観測する」ということである．観測されたこと，「主語的単位の運動」は，実は，それではなく，「主語-述語関係」内部ではけっして理解されないこと，すなわち，「力への意志」量であり，これが「波動」として，粒子の存在の可能性を与えているところの，それ自身は必然的であるが，「主語-述語関係」側からは偶然的な根拠として，すなわち，粒子の存在の確率を与える或る「量」として，捉えられるのである．波動とはこのような主語的単位の存在の確率を根拠づける量なのである．粒子の存在は，「主語-述語関係」内部では必然であるが，「力への意志」量としては，「無い」もの（存在しない）である．その意味ではその存在は偶然的である．粒子の存在の偶然性，すなわち，それがそこに「無い」ことも有り得るということの必然性の根拠は，「力への意志」量側にある．この「力への意志」量は，「主語-述語関係」側からは絶対的に理解されない．しかし，それは或る量であるから，このような量をたとえば，Qというように複素数で表し，これについて方程式を作ることはできる．これが，いわゆる波動方程式である．Qが実数ではないのは，それが「主語-述語関係」からは絶対的に理解できないことがら，虚数的「量」だからである．もしもQが実数と見なされるならば，それが「主語-述語関係」内の事実だとされることになり，ことがらと矛盾するのである．現代物理学はこのようにして成立した量子力学を基盤にしている．したがって，現代物理学は，「力への意志」量に根源的に基礎づけられているのである．そして，「力への意志」量は，「主語-述語関係」から言葉が脱出しようとしていること，すなわち，本質的に歴史的なできごとから眺められていることがらなのである．ゆえに，ニーチェの哲学が歴史的に現れたことと量子力学とは本質的に歴史的に関係していなければならない．

量子という概念を最初に提案した物理学者は，マックス・プランクである．彼はこの説を1900年12月に発表した．ところで，ニーチェは，1900年の8月に亡くなっている．したがって，外面的形式的に比較検討するならば，量子論とニーチェの哲学との間に時間的間隙が存するのだから，両者の繋がりはないということになる．しかし，量子という概念を発表するまでには，それがプランクの思考の中に現れた瞬間とその概念が醸成される期間があったと考えるべきではないであろうか．また，プランクの主観内での量子概念形成の経

緯を考慮すること以外にも，プランクの量子概念形成に至るまでの歴史的・客観的経緯も考慮すべきであろう．具体的には，キルヒホフの黒体放射に関する諸実験成果などから，プランクの量子説へ至る歴史的経緯も考慮に入れなければならない．そうした期間は，ニーチェの思想形成の時期と重なるのである．

ニーチェの基本思想である「力への意志」は，突然閃いたアイデアというものではなく，次第に形成された思想である．それは，「最古の信仰」である「主語-述語関係」から言葉が脱出しようとしていることであり，いわば「主語-述語関係」という殻から雛鳥が，殻を割って外へ出ようとしているにも似ている．「主語-述語関係」は「最古の信仰」であり，その中では，「何かのものが運動している」と頑なに信じられている．これが古典物理学の基本的見方である．この古典物理学の世界像が，量子論によって打破されるのである．複素数の或る量の場が，「何かのもの」の存在確率を与える根底になる．ニーチェの哲学的立場においては，「主語-述語関係」からの言葉の脱出は，量子論とはならない．彼の哲学においては，それは「対抗運動」，ここでは，力学とか物理学批判となるのである．そこでは「力への意志」そのものが歴史的に働くのである．そして，この哲学的・歴史的運動と，古典物理学の量子力学への推移とは，対応していなければならないのである．なぜなら，言葉が「主語-述語関係」から脱出して来ることによって，*文法*的に眺めるための視点からの照明の光が射しこんできて，これまで「何かが運動している」と見えていたことが，実は，*名詞*の領域の中で言葉が「言おう」としていることであるという言象学的文法論的真相が照らし出される可能性が開かれるようになるからである（「主語-述語関係」内に閉ざされている間は，このような可能性は完全に絶たれている）．しかし，「主語-述語関係」から言葉が脱出しようとしている目下の歴史的境位では，*名詞*の領域内で言葉が「言おう」としていることはそのようなこととしては照らし出されず，絶対空間内で「力への意志」が徴候的に表われ働くこととして，つまり，「力への意志」量として見えているのである．これと同じ歴史的時刻に，古典物理学が打破されて量子論へと脱皮しつつあるのである．「力への意志」量は，「主語-述語関係」内のことではなく，したがって，それに対応する物理学的量は，複素数量でなければならない．実数的単位ではないということを数学的に表すためには複素数でなければならないのである．

このように，「最古の信仰」である「主語-述語関係」から言葉が脱出しつつある歴史的時刻と同時刻に古典物理学が量子論へと推移するのである．両者の間には予定調和が存し，この予定調和は，唯一の歴史的必然性（言象学的文法論的必然性）に基づいて成立しているのである．

ところで，以上述べられたことが真実であるとすれば，「力への意志」量に対応する複素数空間は，言葉が言葉として言い得るようになる境位（ニーチェの哲学の更に先）への歴史的進行とともに，やはり同様に推移するのでなければならない．つまり，量子論は，*名詞*の領域内で言葉が「言おう」としていることをそのようなこととして明かすことへ向けて進化（深化）していかなければならないであろう．量子論は自然の本質へ向けて進化（深化）しなければならないことになる．

なお，Qの物理学的意味を物理学側から明らかにしようとしても不可能であることは，ここまでの考察から明らかである（Qが確率を与える関数であるという解釈も本質的ではないことが分かるであろう）．しかし，Qとは，ニーチェの言う「力への意志」量であるとすれば，それが，主語的単位の運動へと翻訳され得る必然性があることになり，したがって，粒子の運動が物理学からは正体不明なQ

から説明されることの可能性が出てくることになる．Qの物理学的意味が分からないのに，Qによって粒子の運動が説明され得るのである．

科学哲学の研究者である原田雅樹氏の次の発言は，このことを語っている．

「しかしながら，ヨルダンにとって，シュレーディンガーの量子的波動関数は，単なる確率分布関数でなく，物理的何かなのである．」[39]

ここで言われている「物理的何か」が「何であるか」，それはただ，ニーチェの自然科学論からのみ解答され得ることはこれまでの解明から明らかである．

このように，Qは「単なる確率分布関数」ではない「何か」であり，それと，「力への意志」量の関係は重要である．以下，このことについて更に詳細な考察を進めて行きたい．

§8 「力への意志」量について（1）

言象学的文法論的には，*名詞*の言象領域で言葉が「言おう」とすること，すなわち，*名詞の格変化*は，したがって，「動くこと」は，ニーチェの哲学的境位からは，絶対空間に「力への意志」の徴候が顕われること，「力への意志」量として捉えられている．「動くこと」は，その場合，ひとつの「作用」として把握される．「力への意志」量は，「力への意志」と同じことではなく，「力への意志」から帰結してくることであり，「力への意志」のSymptomである．§6で引用されたニーチェの言葉（635）がこのことを証明する．そこでは，「作用（ein Wirken）」と言われていたことが「力への意志」量である．本節では，まず，このような意味の「力への意志」量について更に詳しく考察する．

最初に，「作用」と「力への意志」量が同一のことがらを指していることをニーチェの言葉から確認しておきたい．

『力への意志』の634において，ニーチェは，「それゆえ，私はそれを「力への意志」量<ein Quantum„*Wille zur Macht*” と名付ける」と述べた後に，「作用（Wirkung）からなるこうした世界の目に見える世界への置き移し（翻訳）が・・・『運動』の概念である」と続けている[40]．つまり，「力への意志」量の世界は，「作用」の世界と同一の事態なのである．「眼に見える世界への翻訳」ということが，すでに示されたように，主語的単位を入れ込んで解釈するということである．アトムが運動すると我々には「見える」ようになるのである．このような付加物を取り除いた世界が「作用からなる世界」であり，その「世界」は，「力への意志」から生じたものであり，これが「力への意志」量と呼ばれるのである．

ところで，主語的単位を除いた「作用の世界」は，本質的に「主語-述語関係」内部では理解できないことでなければならない．なぜなら，「主語-述語関係」内では，必然的に「何かが運動する（動かされる）」というようにして主語を立てざるを得ないからである．もちろん，我々は主語のない単に作用からなることがらを想像することはできるかもしれない．しかし，そのような純粋に作用だけのことがらは認識できないのである．

「力への意志」量と名付けられたことについて，ニーチェは，また，次のようなことを述べている．

「『力への意志』量ということによって，次のような性格が表現されているのである，すなわち，その性格は無きものとして機械論的秩序から取り除かれることはできない．もし，取り除かれるなら，その機械論的秩序そのものが無きものとなるのである．」[41]

同様のことを「もし，人が力意志（Machtwillen）の照射を無きものと考えるなら，アトムも無きものとなる」と言っている．

ここで「機械論的秩序」という言い方で語られていることは，算定されうるということ

の世界であり，このことが成立するには，どうしても単位が必要になる，つまり，算定されるとは，「主語-述語関係」内部のことなのである．そして，「主語-述語関係」から脱出しようとしている言葉が「力意志」として見えていて，これの「照射」なくしては，「主語-述語関係」，したがって，算定される世界そのものが無きものとなるのである．このような「力意志」の照射は，ニーチェ哲学でのみ見えていることでなければならないのである．

ニーチェがここで「力意志の照射(Strahlung)」と言っていることは，実在的な相互作用と考えてはならない．相互作用は，いわゆるカテゴリー（述語諸相）の一つであり，したがって，「主語-述語関係」の内部のことがらである．これに対して，ニーチェの立場は，「主語-述語関係」そのものから脱出しようとしている境位であり，したがって，そこで考えられている「相互作用」的なことがらは，カテゴリーには収まりきれないような，その意味では「超越的述語」的カテゴリーでなければならないのである．「力への意志」量ということは，このような「超越的述語」性，そのような「性格」の表現である．「主語-述語関係」そのものの本質が，「主語-述語関係」から脱出しようとしている言葉が「言おう」としていることであり，そして，まさに，その本質を「言おう」とするのであるから，すなわち，「力への意志」であるのだから，主語的単位を立てざるを得ない「機械論的秩序」は，それなくしては成り立たないようになっているのである．「超越的述語」的カテゴリーとしての「相互作用」が「力意志の照射」であり，これと主語的アトムとの関係は，実在的関係ではなく，まさに，上で示されたような意味での「量・子」論的関係なのである．「力への意志」量が「力への意志」ではなく，「量」と言われる場合，ここでの「量」も，もちろん，カテゴリーの一つとしての「量」ではなく，「超越的述語」的カテゴリーとしての量と見なすべきである．「主語-述語関係」から脱出しつつある言葉のいわば視界の中にようやく見えてきた「主語-述語関係」の外のことがら（*名詞*の領域）が，「超越的述語」的カテゴリーとしての量である．それは，量子論的には複素数空間（実数的なものとは別の領域を表す）に対応するのである．

§9 「力への意志」量について（2）

前節で示されたように，「力への意志」量とは，「超越的述語」的なカテゴリーである．「力への意志」の境位が開かれたとき，その視界に見えてきた*名詞*の領域での言葉のいわば行動のようなものである．それはまだ言象学的文法論的な意味での「動く」ということではないが，なんらかの意味で「*動詞*・する」がそこで「働くこと」，つまり，<ein Wirken>である．ゆえに，このようなことがらをいかなる「述語」も言うことができない．しかし，いかなる述語も述語できないことがらも，「主語的単位が運動する」というように「翻訳」できるのである．このことをニーチェの言葉で確認しておくことにする．

「機械論的世界を理論的に保持するためには，我々は，常に保留条件，すなわち，どの程度まで我々は二つの虚構によって機械論的世界を貫徹するかという保留条件を付けなければならない．その二つの虚構とは，運動という概念（これは我々の感覚言語から取られた）とアトムという概念（=単位であり，我々の心理的「経験」から由来する）である．－機械論的世界は，感覚-先入見と心理学的先入見をその前提にしているということである．」[42)]

ここでは，アトムとは単位のことであり，それは「心理学的先入見」に由来し，また，運動は，「感覚の先入見」に由来すると言われている．ここで，「心理学的先入見」とは，「自我」といわれていることであり，すでに述べ

たように，これは，主語を立てるということに他ならない．また，「感覚の先入見」とは，言象学的文法論的に「動く」ということが，「主語-述語関係」内，すなわち，「見える世界」内で「運動」とみなされることである．機械論的世界は，常にこのような「保留条件」において維持されているのである．

このような「保留条件」，つまり，虚構を除くと，そこに現れるのが「力への意志」量である．これは，「力学的量（dynamische Quanta）」とも言われている．

この「力学的量」は，その他の力学的量と緊張関係（Spannungsverhältnis）にあると言われている．

ここで力学的量の本質が相互関係であるということが明かされているが，この「相互関係」は，通常のカテゴリーとして理解されてはならない．なぜなら，ここにはもはや，「虚構」はないのであり，つまり，それは，「主語-述語関係」内のこと，信仰的ではないからである．力学的量とは，「力への意志」に基づく量であり，「力への意志」量なのである．これが，「自我と感覚」による先入見によって「主語的単位が運動する」と翻訳されると，そこに「機械論的世界」が，すなわち，算定可能な世界，物理学の世界が成立するのである．

ゆえに，「力への意志」量の本質たる「相互作用」とはどのようなことかが問われることになる．この「相互作用」は，「超越的述語」的カテゴリーなのであり，これはどのようなことかが問われることになる．

ニーチェ自身の説明によれば，そのような「相互作用」は次のようなものである．

「力・量（Machtquantum）は，それが働きかける作用と，それが抵抗する作用によって特徴づけられる．どちらとも区別できないこと（Adiaphorie）がそこには欠けている．それはそれ自体で考えられ得ることである．力・量は本質的に抑圧することへの意志であり，抑圧に対して身を守ろうとする或る意志である．（しかし）自己保存ではない．（すなわち）各々のアトムは，有ることの全体へと働き出ているのである．― もし，人が力意志のこうした照射を無きものとするならば，アトムもまた無きものとなるのである．」[43)]

ここで語られていることは，「見える世界」内の作用ではないということをどこまでも留意すべきである．「超越的述語」的なカテゴリーについて語られているのであるから，その内容を考察するためには細心の注意を要する．

ここで「力・量」と表現されていることが，「力への意志」量である．「力への意志」量とは，すでに述べられたように，*名詞*の領域において言葉が「言おう」とすることであり，ニーチェの立場から見ると，それは，絶対空間におけるKraft，すなわち，「力への意志」量と見えているのである．「言おう」とすることは，一種の意志的なものであるが，それは，外的となっていて，「量」となる．「言おう」とは，言葉そのものに成ろうとしていることであるが，その目的地としての「言葉そのもの」は，それとしては顕われていないのであり，「力」とみなされる．ゆえに，言葉が「言おう」とすること，それも，絶対空間で「言おう」とすることは，ニーチェ哲学の視界内では，「力への意志」量と見なされるのである．

ところで，ニーチェ哲学の立場は，まだ，言葉が「言おう」としていることになっているのではなく，「主語-述語関係」から言葉が「言おう」として脱出しようとするある境位である．ゆえに，その哲学から眺められる光景である「*名詞*の領域で言葉が『言おう』とすること」は，ある制限をもつ．つまり，「力への意志」量は，必然的に，何らかの意味で制限に対して抵抗し，より強くなろう（自らを克服せん）としているのである．しかし，ここで言われている「制限」とは，「力への意志」量に外的な抵抗勢力というようなもの

ではなく，自らの本質から由来する抵抗性なのである．ここでは，働きかけることと抵抗とが一体的である．抑圧し，支配せんとする意志は，自身に対する抵抗を必然的に有することになり，自身の抑圧せんとする働きに抵抗するのである（強くなろうとすること）．この有り方は「自己保存」ではない．このような事態をニーチェはまた，次のようにも言う．

「抵抗の度と優勢（Übermacht）の度―これがあらゆる出来事には問題なのである．」[44)]

Übermachtとは「言葉が『言おう』とすること」なのである．そして，それがまだ*文法*としては捉えきれず，「力への意志」と見えている限り，そこに必然的に「制限」が存し（それ自身を低める何かが存する），これは，Übermachtに対して「抵抗」的なものと見なされる．両者の区別は，ニーチェ哲学のエレメントそれ自身の歴史的な位置を表現している．すなわち，その位置で，言葉は，「主語-述語関係」から脱出せんとしているのであり，言葉が「言う」というようにはまだなっていないのである．

以上のように，Kraft同志の「相互作用」は，いわゆるカテゴリーではなく，歴史的に見えてきた*名詞*の領域内の出来事として理解されるべきであることがニーチェ自身の言葉から立証される．ニーチェの言う「抵抗と優勢」との相互関係は，思惟には理解不可能なことがらである．その意味で，その相互関係は，量子論的に言うなら，複素数空間内の出来事なのである．なぜなら，それは，実在的な関係ではないからである．ニーチェの言う「抵抗と優勢」の相互関係が，「主語-述語関係」内に翻訳されることによってアトムの間の相互作用が観測されるのである．「各アトムが全存在に作用を及ぼしている」ということになるのである．各アトムが他のアトムを抑圧しようとしているということではない．そう受け取られると，「抵抗と優勢」との関係は単なる「相互作用」のカテゴリーとなり，ニーチェが語ろうとしている真意が逸せられ誤解されることになる．ニーチェ哲学の視界に見えている「抵抗と優勢」の関係の翻訳がアトム間の相互作用となるのであるから，各アトムがライプニッツのモナドのように全宇宙を映しているということでもない．むしろ，量子論のほうが，ニーチェの言わんとしていることがらに近いのである．

このように，「力への意志」量は，「抵抗と優勢」の相互関係にある．そして，これが量子論的には何らかの複素数量Qと見なされ，いわゆる波動関数として解かれる．では，「抵抗と優勢」の関係は，どうして波動的と見なされ得るのだろうか．

「力への意志」量という「超越的述語」的カテゴリーは，*名詞*の言象領域で言葉が「言おう」とすることを潜在させている．それを潜在的に含むがゆえに，「抵抗と優勢」という関係が成立するのである．*名詞*の言象領域で言葉が「言おう」とすることは，言葉が言葉自身を「言う」ことへと向かうことではなく，それの転倒であり，言葉は自身の外へ出て行こうとしているのである．この転倒性が，「*名詞*の言象領域で」ということである．*名詞*の言象領域では，言葉が「言おう」とすることが，それ自身の外へと出て行くこととなるのである，つまり，「動く」ということになるのである．このような言（コト）がらが，まだそのようなこととしては捉えられない「力への意志」の立場から見るなら，「優勢と抵抗」という関係として見えるのは必然である．そして，この関係は，まだ，*名詞*の言象領域でのことがらではないのであるから，まだ「時間」的であることになる．なぜなら，「*名詞*の言象領域」は*文法*的なことであり，したがって，無「時」的であるからである．まだ無「時」的ではないとは，まだなお依然として「時間」的であるということである．しかし，それは単に「時間」の中に経過するというも

のではなく,「時間」的でありながら,無「時」的性格も持つというようになっていなければならない．このような有り方は,「回帰」性である．同一のことが永遠に回帰するということが,「時間」的なことが無「時」的なものに近づくということなのである．未来性が過去性となるのであり，すでに有ったことへこれから至ることになる.「優勢と抵抗」の関係は，同時にまた，同じことが回帰しているということでもある.「優勢と抵抗」の関係は絶えず転変することでありながら，同時に,全体がまったく動かない固定的なこと（無「時」的）に近づいていること,「（永遠）回帰」的なことなのである．

このことは，一般的には,「力への意志」と「永遠回帰」との繋がりの必然性として明らかにされるべき事柄である．

或る時間が経過すると同じことが回帰することは，量的には波動性と受け取られる．複素数量Q（t）は，tの任意の関数ではなく，時間的に回帰してくる性格を有する関数でなければならない．そして，この関数は，そのような回帰性格を絶対空間（*名詞*の領域を意味するが，そのものとしてはまだ認識されていないためにこう呼ばれる）によって条件づけられているのでなければならない．かくして，Q（t）は，Q（t，r）である（rは空間<Raum>を意味する）．tとrとはまったく独立的関係にあるのではない．rであるかぎり，Qは,波動的となっているのである．ニーチェ的な意味での「絶対空間」内で波動関数が可能になっているのである．この波動関数は，したがって,*名詞*の領域内で言葉が「言おう」としていること，つまり,「動く」ということへの接近性を表現していることになる．ここで「接近性」と言われている理由は，すでに述べたように，回帰性格は，時間的なものが無「時」的なものに接近しているということであるからである．そして,このような「接近性」は,「力への意志」の本質と対応しているのである．なぜなら,「力への意志」とは，それがまだ「言葉が言おうとしていること」ではないということであるからである．

ゆえに，量子論的波動関数の物理的意味とは，それが自然の根本的本質規定に接近しているという点にある．波動関数は，自然の本質を究極的に明らかにしているというのではないが，少なくとも，それに迫っているのである．それが複素数量であることは，そのような接近性を表わしているのであり，自然の本質規定が論理的なものではないこと（本質的に「*文法*的」であること）を我々に教えているのである．理性には理解できないことが「見える世界」へと翻訳されると「粒子が運動する」となるのである．粒子が存在しているのではない．我々,「見える世界」の側からは，粒子が存在しないということは有りえない．何もないならば，どうして，何かの作用が観察されることができようか．それでも，やはり粒子は存在しないのである.「接近」態は,「主語-述語関係」をまだ完全には脱出していないのであり，したがって，粒子へ翻訳され得る可能性を残している．波動性とは，粒子として見え得る可能性を自身の中にまだとどめていることなのである．波動関数は，粒子の存在の可能性を与えることができる複素数量であり，粒子の存在可能性を与えることができるのである．しかし，自然の本質規定は,観測される側にはない．むしろ，波動関数側にあるのである．なぜなら，接近とは,*名詞*の言象への接近であるからである．

量子論に含まれる困難な問題は，それが自然の本質規定に近づいていることの表れである．その真実の意味は「見える世界」の側からは，まったく理解されない．しかし，それゆえにこそ，背理ではあるが，それは自然の本質へと正しく迫っているのである．

ヘラクレイトスの断片に次のようなものがある．

ἁρμονίη ἀφανὴς φανερῆς κρέττων[45)]

（見えない秩序は，見える秩序より上位に立つ）

アトムが運動するという「見える秩序」は，「力への意志」量という「見えない秩序」に支配されているのである．

§10　自然法則

「力への意志」の立場からは，*名詞*の言象領域は*名詞*という*文法*事項であるとはまだ捉えられていない．しかし，その立場から，はじめて，*名詞*の言象領域内で言葉が「言おう」とすることが「力への意志」量として，いいかえれば，「力への意志」の或る外的様相として捉えられるようになるのである．ニーチェ哲学の視界の中でのみ*文法*的状況が，それ自身としてではないにしても，とにかく或る変装した姿で見えるようになるのである．「力への意志」量は，言象学的文法論的には本来，「動く」ということであるが，ニーチェ哲学の視力は，まだ，それを見て取ることはできない．それはまだ「優勢と抵抗」の「或る作用（ein Wirken）」として見えている．ゆえに，ニーチェ哲学の視野の中に見えてきたこの「力への意志」量なるものは，「主語-述語関係」内では理解できないことである．つまり，「判断」とか「推理」，総じて思考能力の埒外のことがらである．前節で示されたように，「力への意志」量は「超越的述語」的カテゴリーなのである．したがって，「力への意志」量は，「主語-述語関係」内の言語に「翻訳」されなければならない．ニーチェの言い方では，「見える世界」に翻訳されなければならないのである．主語的単位が入れ込まれ，つまり，アトムとか素粒子など，広い意味での不可分割的粒子が持ち込まれ，「それが運動する（動かされる）」というように「主語-述語関係」の国の国語に「翻訳」されるのである．古典力学においては，「それが運動する」で事がうまく運んだのであるが，ニーチェ哲学が歴史的に起きたことによって，言葉は「主語-述語関係」から脱する態勢となり，これにともなって，*名詞*そのものも，或る制限下ではあるが，歴史的に出現せざるを得なくなり，「それが運動する」の元の原典が実は存在することが知らされるのである．こうして，物理学にもそのような「原典」存在が歴史的な仕方で知らされ，量子論が起きてきたのである．ところが，翻訳される前の元の原典には，*文法*事項が書かれているのであり，すなわち，「主語-述語関係」からはまったく理解できない国の言語で書かれているのであり，それを物理学はそれでも何らかの意味で「量」として，それも，複素数量で表現するのである．或る複素数量Qとして，「力への意志」量が表示される．Qに相当する「何か」は，それを見えるようにすると，つまり，「（思考されるように）観測する」と，「粒子が運動する」というように翻訳されるのである．「観測」以前には複素数量Qに対応的なことが，「観測」されると「粒子が運動する」となるのである．したがって，自然とは何かという問いに対して，それは，「力への意志」を内奥に秘めたKraftであると答えれば，何も問題なく，事実，自然とはそれであるのであるが（ただし，それはまだ「中途」的ではあるが），思考する者にとっては，つまり，自然科学者にとっては，それでは納得できないということになる．科学者は複素数量Qの物理的意味を理解したいということになる．すでに述べたように，ヨルダンのような問いかけが必然なのである．しかし，これまでの解明が正しいとすれば，量子論は，科学者に哲学的認識へと意識の転換をするようにと呼び掛けているということになる．ところが，自分の考え方を転換しなさいという量子論からの呼びかけに科学者は素直になれないのは必然である．どうしても，数学的に自然を捉えようとする意志を科学は捨てることができない．原主語である単位を基礎とする数学を捨て去ることは，人類最古の信仰，つ

まり，「主語-述語関係」を捨てることを意味し，これを為すのはまさに哲学だからである．

ガリレオは，アリストテレスを批判し，近代自然科学を哲学から分けた．「動く」とは「動かされている」のではなく，むしろ，慣性法則によって等速直線運動をしているのである，との思想にかじを切ったのである．力が加わらない限り，物体は等速直線に「運動する」のである．アリストテレスが「動く」へと迫ったことは，もはや，そこでは痕跡も残らず，忘却されている．しかし，量子論は、或る意味で再び「動く」の真相に戻ろうとしていることになる．では，その場合，慣性法則とは「何であった」のだろうか．自然法則とは一体，何であるのか．

ところで，「力への意志」量は，ニーチェ哲学の視界の中に見えている限りでの「動く」ということ，すなわち，*名詞*の領域で言葉が「言おう」とすることである．この「動く」ことは，ニーチェ哲学の視力をもってしてもまだ見ることができないことがら（言がら）である．「動く」とは，このように，本質的に*文法*的状況であり，*文法*的なものは，無「時」的である．「動く」ということは，「時」の中で起きている事象ではなく，「*名詞の格変化*」なのである．その意味では，「動く」ということは，何か永遠的であることになる．「動く」ということは，いわば永遠の*文法*書にすでに「書かれている」ことなのである．しかし，このような意味の「永遠の*文法*書に書かれていること」は，「主語-述語関係」からは，理解不可能なことである．そして，理解不可能な無「時」的な原文を理解可能な「見える世界」の国語に翻訳すると，それがいわゆる「法則」といったようなことになるのである．つまり，法則性として翻訳された原典の原語は，*文法*の無「時」性である．したがって，法則は，無「時」的なこととは別次元のことでなければならない．「力への意志」量は「作用」として，むしろ，ちょうど波とか波動のように留まらず流動的であるが，このことは，「動く」こととして永遠なる静止状態であるのである．まったく矛盾しているこのような理解不可能なことの「見える世界」への翻訳が「自然法則」である．複素数量Qは，前節で明らかになったように，「動く」ということへの接近状態にあり，したがって，まだ無「時」的ではなく，その意味ではまだ「時」の中にある．しかし，「時」の中にありながら，同時に無動的でもあり，回帰的本質をもつ．それは，波動関数となっているのである．この波動関数の状態は，いわば，「主語-述語関係」と「動く」との「中間」であり，したがって，それは仲介者的な役割を果たす．「粒子が法則にしたがって運動する」ということをこの仲介者が与えるのである．なぜなら，この仲介者によって，「粒子が運動する」に回帰性（これは本当は*文法*の無「時」性である）という性格が与えられるようになるからである．波動関数は，いわば，神々の使者，ヘルメースのように，*文法*的なこととしての「動く」ということを我々の「見える世界」に伝えるのであり，「動く」ということを，「法則にしたがって，何かが運動する」というように「分かりやすく」翻訳してくれるのである．ここで「法則に従って」は，原文には「*文法*の無「時」性」と，「何かが運動している」は，原文には「動く」と記されていることなのである．物は慣性法則にしたがって等速直線運動をする．これはどういうことなのかが少し理解できるようになるであろう．

自然法則とは，厳密には，すなわち，言象学的文法論的には，*名詞*の言象領域が*文法*的であること，永遠の*文法*書に「書かれていること」，したがって，「動く」ということが無「時」的であることを言っている．しかし，我々，「主語-述語関係」という最古の信仰に閉ざされている者には，「動く」とはけっして無「時」的とは見えない．むしろ，まったく逆に見える，つまり，「動く」とはまさに

時間的なのである．我々には「何かが運動する」としか見えない．そして，物理学者は，更に，「何かが或る法則にしたがって運動している」に違いないと見るのである．「何か」が質量をもつものである場合，それらの運動にはニュートンの力学的法則が存している．それは，しかし，慣性法則を前提にしている．しかし，これらの見方は，すべて一つの頑なな信仰によるある種の妄想のようなものであることをニーチェは見抜いた．「何かが法則にしたがって運動する」のではなく，「力への意志」量が働いているのである．そして，この「力への意志」量とは，言象学的文法論的解明が正しいとすれば，或る「中間」状態であり，「主語-述語関係」と「動く」との間を仲介するものなのである．この仲介によって，「動く」ことは，「何かが法則に従って運動する」というように，解釈される．「力への意志」は，その意味では，深い意味で，神の言葉を人間にもたらす使者，ヘルメースであり，「言おう」ということを「主語-述語関係」にもたらす働きをするのである．

ゆえに，「力への意志」量は，実数量ではありえない．なぜなら，そこには主語的なものは存在しないからである．Qは，複素数量以外にはありえない．それは思惟不可能な量である．そして，Qは，いわゆる自然法則性をもつのではなく，中間状態として，永遠回帰性をそこに顕わさなければならないのである．この永遠回帰性の仲介によって，「見える世界」に法則がもたらされるのである．量子論そのものは，このような複素数量Qの仲介性を知らない．それゆえ，波動関数の物理的意味についてさまざまな解釈が存するようになる．もし，物理学が真実自然学であろうとするならば，波動関数の本質的意味を尋ねることが唯一為されねばならないということになる．

さて，ここで，法則と回帰性との関係がかなり明瞭になったので，その関係についてのニーチェの認識を検討してみたい．

「私が或る規則的な出来事を一つの公式にもたらすならば，私は現象の全体を表すことを容易にし，省略し，等々をすることになる．しかし，私はいかなる『法則』も突き止めたのではなく，次のような問いを立てたのである，すなわち，ここで何かが反復されているということはどこから来たのだろかという問いである．つまり，さしあたっては未知なる諸力（Kräfte）と力の発現（Kraft-Auslösungen）の複合体が公式に対応しているということは推測である．言いかえれば，ここで諸力が法則に従い，その結果，その従うことのゆえに我々はどの場合も同じ現象をもつと考えることは神話なのである．」[46)]

もし，これまでの解明に丁寧についてきた人がこのニーチェの言葉に接するなら，彼の捉えていることが極めて厳密な事態であることが理解されるであろう．また，もし，量子論の本質について真に真剣に考え抜いた人が居たとして，その人がこのニーチェの思索に接するならば，きっとその人は，明察を与えられることであろう．

ここでは，「法則」が「未知なる諸力とその発現の複合体」に対応しているとは限らないことが洞察されている．後者は，本質的には「力への意志」量のことであることは明白である．そして，「力への意志」量は「反復性」を本質的にもつのである．この「反復性」は，別の断片においては「回帰性」であると言われている．したがって，「法則」を見出すということの奥には，「何かが回帰しているとはどのようにして可能になるのか」という根本的問いが立てられていることになるのである．

では，かの「複合体」の回帰性はどこから来るのだろうか．それは，すでに説明されたように，「力への意志」量の「中間性」から来るのである．その意味では，波動関数は，自然法則をかの「根本的問い」に引き上げる

ものでもあるということになる．神話でしかなかった自然法則の奥に潜む回帰性への問いを波動関数は，現在させているのである．いいかえれば，自然法則そのものの真相を明かそうとしているのである．次のニーチェの発言は重要である．

「法則は存在しない．（すなわち）どの力（Macht）も各々の瞬間にその最後の結論を引き出しているのである．他でもあり得るということが存在しないということに算定の可能性が拠っているのである．」[47)]

*名詞*の言象領域で言葉が「言おう」としていることが，法則の起源になっている．ニーチェ哲学の視座は,「力への意志」にある．「力への意志」とは,「主語-述語関係」から言葉が脱出しようとしていることであり，その意味では，まだ言葉が「言おう」ということとして言われているのではない．ゆえに，その視界には,「動く」ということの*文法*的実状は真には見えていないことになる．その視界には，今のところ「動く」ではなく,「力への意志」量が見えているのである．そのような「力への意志」量は,すでに述べたように,「優勢と抵抗」との相互関係である．そして，この関係は,「結論」的であることになる．なぜなら，このようになっているのは，*名詞*の言象領域で言葉が言おうとしていることからの帰結であるからである．つまり，何かの規則にしたがって「作用」が起きるのではなく，それ自身によって起きたのである．それ以外の結論が引き出されることは有りえないのである．しかし，これは，単なる必然性とか規則性でないことは明白である．「優勢と抵抗」という相互関係が結論になっていること，これは回帰しているということの別の見方なのである．

ゆえに,「法則は存在しない」と言われるのである．なぜなら,「法則がある」ということは,「優勢と抵抗」というKraftの関係がどこからその結論を出してきたのかという問いを立てていることを意味するのであり，それ以外のことを意味するのではないからである．つまり，ニーチェ哲学の視界のなかに波動関数の真相（=「力への意志」量）が見えているのである．物理学は，波動関数の真の意味を理解できないけれども，それの本質がニーチェ哲学の視界には見えているのである．しかし，ニーチェはその眺めが波動関数の真実相であるとは知らなかった．彼は，その見ものを「力への意志」量であると見た．歴史的に同時刻に，同一の領野が，出現したのであり，その領野は，ニーチェの哲学からは「力への意志」量として，物理学からは，波動関数として見えているのである．同一の領野を二つの眼が見ているのであるが，両者はお互いを知らない．歴史的とは,「主語-述語関係」から言葉が脱出しようとすることが起きたということである．このことはニーチェ哲学が歴史的に出現することであるが，この出来事に対応的に量子論が起きたのである．ゆえに，量子論は「主語-述語関係」からの言葉の脱出に対応的なことがらであり，古典力学からの脱皮という意味をもつのである．つまり，量子論はニーチェが指摘した法則の真の意味に向けて歩み出したのである．

§11　時間と空間

「力への意志」量は,「超越的述語」的カテゴリーとして,「優勢と抵抗」という相互関係になっている．「超越的述語」性は，思惟の埒外ということなので，理解不可能であることを意味する．ゆえに，その量は，物理学的に表そうとするならば,実数的量ではなく，複素数量Qである．それはもう結論が出ている状態量であり，これがいわゆる運動法則を与える原理となる．この原理が「見える世界」に翻訳されると,「何か粒子のようなものが法則にしたがって運動する」ということが観察されるようになるのである．したがって，決定された波動関数は，本質的に法則ではな

いということになる．それは法則に従うのではなく，極めて厳密に捉えるなら，永遠回帰的であり，それより上位の原理を表しているのである．逆に，「力への意志」量は，この上位の原理によって制限されているということになる．その上位の原理は，「力への意志」量を「量」として制限する何かであり，*文法*的原理，*名詞*の言象領域であり，すでに述べたように，ニーチェ的には「絶対空間」である．「絶対空間」とは，ニーチェ哲学の視点より先行している（歴史的にはニーチェ哲学の後から来る哲学）視点から見るならば，*名詞*の言象領域なのである．

*名詞*の言象領域で言葉が「言おう」としていることは，*未来*（「言おう」ということは未来的であるから）の影像とも表される．それは「時」の影像のようなものであり，その意味では，「動く」ということは，時間的である．*名詞*の言象領域はニーチェ哲学の視界においては「絶対空間」と捉えられている（信じられている）．その空間内で「動く」ことは，「優勢と抵抗」との相互関係と見えている．そして，これは時間的な出来事であることになる．ゆえに，ニーチェ哲学の視界内においては，空間と時間との関係の本質が捉えられ得るようになっているのでなければならない．しかし，その両者の統一性の本質が，「*名詞*の言象領域内で言葉が言おうとしている」ということであるとはまだ捉えられていないのである．このような時間と空間の統一性は，量子論の更に先にある領野のことになる．なぜなら，「力への意志」量の制限性，それを制限する方にそのことは関係するからである．

「力への意志」量はこの意味で有限的であることになる．「絶対空間」内で，言葉が「言おう」としていることは，「力への意志」量が有限的であることとして表現されるのである．「言おう」としていることは，「力への意志」の哲学的視界においては，まだ言葉が「言う」ことではなく，それに成ろうとしていることであり，*文法*的には*動詞*が*名詞*において兆すことに応じて，「力への意志」の徴候的表われである．*動詞*は，Werden（Werden）の括弧内のWerdenとも見ることができ，そこでは，言葉が言象に成ろうとしている．そして，*動詞*は*Zeit-wort*であり，「時（Zeit）」そのものである．「動く」とは，したがって，*動詞*が*名詞*の洞窟内の霧に映る影のようなものなのであり，その影はまた「時間」的でもあることになる．「力への意志」量もまたそうした「*動詞*の影」的であり，時間と空間の「と」の真相を何らかの仕方で含んでいる．ゆえに，「力への意志」量が有限的であることは，時間と空間の統一性に深く関係しているのである．両者は同じこと，つまり，*名詞*の領域で言葉が「言おう」としていることがまだそれとしては顕われていないということを表現しているのである．

ニーチェは「力への意志」量の有限性をエネルギーに関連させているように見える．たとえば，次のように言われている．

「機械論的に考察されるならば，総-生成（Gesamt-Werden）のエネルギーは不変（konstant）である．」[48)]

「エネルギーの恒存の命題は永遠回帰を要求（必要と）する」[49)]

「*動詞*・する」がἐνέργεια（エネルゲイア）の定義である（注の２の二番目に挙げられた論文に詳しく論じられているのでそれを参照して欲しい）．*名詞*の言象領域で「*動詞*・する」ことが兆すこと，すなわち，「動く」ことが「力への意志」の視界から眺められると，それは「力への意志」量と見える．したがって，「力への意志」量はἐνέργειαなものを隠された下敷きにしていて，それによって拘束されている．このような拘束はエネルギーの不変ということになる．

本来「時」の影像として見えていなければならないことが，「絶対空間」内での「力へ

の意志」量の有限性として，エネルギーの不変として見えているのである．

こうして，量子論は，空間と時間の「と」の真相に向けて歩みを進めることになる．このような量子論の向上の道は，「*名詞*の領域で言葉が言おうとする」ということへと，「動く」ということへと向かうことなのである．

言象学的文法論的に厳密に言うならば，「空間」とは「*名詞*の言象領域」のことである．そして，その領域において「言葉が言おう」としていることが，つまり，*Werden*（Werden）の影が，「時」の影像としての「時間」である．しかし，このことは思惟によっては把握されない．それはただ，*文法*論的眺めである．このような言象学的文法論的眺めを見ることができる視点に近づいているのがニーチェ哲学，すなわち，「力への意志」の哲学的境位である．そこからの眺めにおいては，「*名詞*の領域」はまだ「*名詞*の領域」ではなく，「絶対空間」と見え，「言葉が言おう」とすることは，その「絶対空間」によって限界付けられた「力への意志」量と見える．「力への意志」量の具体相は，「優勢と抵抗」の相互関係である．「力への意志」量は「時間」の真相に近づいている状態であるが，まだ，それは「言葉が言おう」としていることとして，「動く」こととしては捉えられないのである．ゆえに，「力への意志」量は，「空間と時間」のその「と」ということに至ろうとしていることになる．なぜなら，その両者の統一性の根底となることが「*名詞*の言象領域で言葉が言おうとすること」であるからである．まだ，このことが顕わにならない時に，それは「空間と時間」の統一性として見えるのである．「力への意志」量は，物理学的には，複素数量Qと数学的に表されることが解明された．Qは空間と時間の関数であり，そこでは，空間と時間の「と」は本来的には無視されている．そして，「空間と時間」の「と」が見えてくるようになると，「力への意志」量は自身を解消させようとするのに対応して，複素数量Qもまたそれ自身を解消させるようになる．波動関数における時間と空間の統一性が見えてくるようになると，量子論はより高いことがらへと解消されなければならないのである．これは，物理学の自己解消（自然が言象学的文法論的に明らかにされること）ということになる．*文法*的なことがらを顕わそうとすることは，物理学の自己解消を意味するのである．これは歴史的必然であり，人間的なことではない．

空間は時間との関係なくして，独立的に有るのではない．なぜなら，空間とは，*名詞*の言象領域であり，*名詞*は*動詞*の最「外」界として，そこで言葉が言おうとしているところの「そこ」であるからである．このような*文法*的実状は，「*動詞*が*名詞*の領域にそれの影として映る」というように表現できるであろう．空間とは，このようなことになっていることであるから，それは独立的なものではない．しかし，空間と時間の「と」ということの真相は*文法*的にしか明らかにならないのであるから，それはそれ以前の境位からすればどこまでも謎のままに留まることになる．自然とは何かという問いの答えは，空間と時間の「と」の中に隠されているのである．

ニーチェの哲学的境位は，「主語-述語関係」を去って行こうとしている立場であるので，空間と時間の「と」の真相への道をはじめて歩き出したことと見なされ得る．これは，すでに明らかにされたように，量子論が歴史的に現れることと予定調和している．「主語-述語関係」内部では，「と」への道は見えない．このことは，空間と時間との関係そのものが問題とされないことを意味する．空間は「絶対静止空間」と信じられている．その中に時間がいわば無関係に流れている．このような「絶対静止空間」という信仰が崩れるようになって，アインシュタインの相対論への道が可能になったのである（量子論の更に先にこ

の相対論が現れるというように見てはならない．ここで時間と空間の「と」ということは，*名詞の格変化*へと近づくという意味であるからである）．

空間の本質について，「主語-述語関係」内にある哲学的立場は，また，同様なものになる．つまり，それは或る意味で独立的なものと見なされるのである．ヘーゲル哲学は，このような見方をする．

「自然の最初のあるいは直接的な規定態は，自然の外自有（Außersichsein）の抽象的な普遍性である．外自有の媒介のない無関心性であり，空間である．」[50)]

ヘーゲル哲学の立ち位置は，「主語-述語関係」内，つまり，言象領域に対する論理領域側にある．言葉はここから脱しようとしているけれども，その枠からニーチェの場合のように逃れることがまだできない．しかし，そこから抜け出ようとすることこそ，「主語-述語関係」の本質なのであるから，この関係の本質規定は，否定性として，すなわち，概念（Begriff）として示されることになる．抜け出ようとしているものは言葉，ロゴスであるが，「主語-述語関係」内では概念としてしか捉えられないのである．「主語-述語関係」から抜け出て行こうとしている言葉は「言おう」としているのであるが，自身の外にまだある．したがって，概念とは，言葉的なものと外性の統一態であり，これが理念（Idee）である．ヘーゲルによれば，理念はまず自己の外にあり，そこから，自身を顕わすべく生成の運動をする．最初の直接的な自己の外にあること，つまり，最初の「外自有」が空間である．

ヘーゲルによってこのように規定された空間は，*名詞*の言象領域と確かに類似している．*名詞*の言象領域とは，*動詞*の最「外」界であり、*動詞*の「外自有」とでも言い得ることだからである．しかし，根本的に異なるのは，ヘーゲルの「外自有」は，「主語-述語関係」内にあり，だからこそ，「外自有」なのであるが，*名詞*は「主語-述語関係」の「門外」領域であり，*文法*論的な意味のその関係の「外」であるという点である．

ヘーゲルでは，このような「外自有」において措定された（外自有の真相が顕現すること）否定性が「時間」である．否定性とは上で述べられたように，本来は，言葉が「言おう」としていることであり，生成と見なされる．そこで，ヘーゲルは時間を「直観された生成」とも言うのである．外自有の中で自己に成ろうとすることは，自己の外に出て行こうとすることと一つである．これが「直観された生成」ということの意味である．*名詞*の言象領域でもまったく同様のことが成立する．*名詞*とは*動詞*の最「外」界であり，そこで言葉が「言おう」としていることが自身を去っていくことになっているのである．*動詞*は「時」そのものであるから，*名詞*の領域では，「時」そのものの影がそこに映ることになる．この，「動く」である（*動詞*の）「影」（以下，「動く」影と表す）が言象学的文法論的に定義される「時間」である．これは「主語-述語関係」の外部の出来事であるに対して，ヘーゲルの「時間」規定は「主語-述語関係」の内部にあるのである．それでも，両者の間には確かに類比的関係が存している．

量子論は古典力学を脱する道であり，これは，上のように，ヘーゲルの空間と時間の関係が，*文法*論的な意味の空間と時間へと移行することに対応する．しかし，量子論はまだ中間的（途上的）であり，これはニーチェ哲学の境位と対応している．量子論は真の意味で「空間と時間」の「と」へと進んで行かなければならないのである．それは，ヘーゲルにおける「空間と時間」の関係が*文法*論的な「空間と時間」の関係へと至ることに対応する．ヘーゲルの「自然哲学」と言象学的文法論的な自然論とは類比的である．ヘーゲルの「自然哲学」をいわば量子化するとそれが言象学的文法論的な自然規定に繋がるとも言え

る．両者の中間にニーチェの自然科学論が立つのである．ヘーゲルにおいては概念として見えていた言葉そのものの「言おう」とすることがニーチェでは「力への意志」と捉えられている．§3で示されたように，これにともなって，空間はニーチェでは「絶対空間」として「信じられ」，それは「力<Kraft>の基体」となるのである．この全体が物理学の歴史的発展と予定調和的である．

では，以上のようであるとすれば，ニーチェ哲学から「時間」はどのようなものとして捉えられるのであろうか．これまでの解明の正しさがこのことによって立証されるはずである．

ニーチェは，「絶対空間」とともに「時間」についての考察もしている．そこでは，次のように語られている．

「時間永遠的．しかし，自体的には空間も時間も存在しない．」[51)]

最初の「時間永遠的」は，原文では<Die Zeit ewig>となっていて，<Die Zeit ist ewig（時間は永遠的である）>ではない．<ist（である）>が欠けているのはおそらく理由があるのではないだろうか．本質的には，ニーチェの言うように，「空間と時間は存在しない」．なぜなら，空間は*名詞*の言象領域であり，また，時間は，*名詞*の領域で*動詞*が兆すこと，すなわち，（*動詞*の）「動く」影であるからである．しかし，ニーチェは「絶対空間」の存在を「信じている」と述べている．こうニーチェが語るのは，ニーチェ哲学の立場においては，まだ*名詞*の言象領域は，*名詞*の言象領域であるとは認識されず，Kraftを成立させている或る限界づけているものとして捉えられているからである．これにともなって，「時間」は，本来，*名詞*の言象領域内における「動く」影であると認識されず，「力への意志」量の「何か」と見なされることになる．したがって，ニーチェにおいては，「時間」はそれ自体で存在するのではなく，Kraftの何か本質を構成するものとして理解されるはずである．しかし，「時間」とKraftとはまったく同一とは言えない．ニーチェ哲学においては，「時間」の本質がKraftに即して把握されるべきである．ちょうど，「絶対空間」を「信ずる」と言ったのと同様なことが「時間」についても語られるべきである．それが「時間永遠的」という言葉であろうと思われる．Kraftは永遠的ということと関係しているのであり，この面がニーチェの理解している「時間」なのである．Kraftという概念だけでは，そこから「永遠的」は出てこない．Kraftに何か必然的な「永遠性」は，「時間」の本質から導かれるのである．「時間」は，*名詞*の言象領域に映っている*動詞*の影であり，*動詞*は「時」そのものとして「時」の中にはなく，「時・語」であり，したがって，「永遠的」である．つまり，「時間」は永遠の影と言える．この影が「動く」ことでもある．両者は，*名詞*の言象領域内に兆した*動詞*の二つの面を表す．「動く」は、「*動詞*・する」の面を，「時間」は，「時・語（*Zeit-wort*）」の面を表している．そして，この「動く」がニーチェの立場からは，「力への意志」量と見えている．ゆえに，「力への意志」量には，もともと永遠性が影の如く君臨していることになる．「力への意志」量そのものが永遠であるのではなく，「時間が永遠的」なのである．しかし，ニーチェの立場からは，「・・・ではなく，時間が永遠的である」とはまだ言えないのである．そこで，「時間永遠的」と述べることになる，<ist>が欠けるのである．

このように，ニーチェは，「時間」をKraftに即して，「永遠」的と見ている．彼の立場からは，「時間」は永遠であるとは言えないのである．なぜなら，それはただ，Kraftとの関係性において，いわば，そうであると信じられることだからである．この意味では，ニーチェはプラトン哲学に迫っているということになろう．なぜなら，プラトンは，すで

に，時間が，永遠の動く幻影であると認識していたからである．

εἰκὼ δ′ ἐπενόει κινητόν τινα αἰῶνος ποιῆσαι，[52]

（そして，神は永遠の何か動く幻影を作ろうと考え，）

*名詞*の言象領域において言葉が「言おう」としていること（*名詞の格変化*）は，言象学的文法論的な眺めであり，そこにはまだ至っていないニーチェ哲学の立ち位置から見られると，それは，「力への意志」の外的な様相として，「力への意志」量と見える．*名詞*の言象領域で言葉が「言おう」とすることは，*動詞*がそこにその影を映すことでもある．*動詞*は「時」そのものであるから，*名詞*の領域に映された*動詞*の影は「時」の影，つまり，永遠の影としての「時間」である．*動詞*は*Werden*（Werden）のカッコ内のWerdenと見るなら，*動詞*の影とは，Werdenの影である．斜体の*Werden*は，言葉自身が「言おう」としていることであるから，*動詞*の影は，本来的には言葉が「言おう」とすることである．これが*名詞*の言象領域では「動く」ということである．そこで，「時間」は永遠の動く影ということになるのである．或る意味で，ヘーゲルが「時間」を直観されたWerdenと見たことがより深く「時間」の本質に迫っていると言えるかもしれない．しかし，プラトンの言っていることが，思惟の領域で遂行されていることではなく，*文法*上の出来事であるとすれば，上で語られていることは，正しく，「時間」そのものの本質規定になっていることになる．「神が考え，」と言われていることは，少なくとも，「永遠の動く影」が，思惟され得ることではないこと，そうではなく，*文法*上のことがらであることを示唆している．そして，このような*文法*上の「時間」の定義にニーチェの「時間」規定が迫っているのである．

では，Kraftと「時間」との関係について，ニーチェ自身はどのように見ているのか確認しておきたい．

「Kraftは静止することができない．『変化』はその本質の中へ入りこみ帰属している．かくして時間性（Zeitlichkeit）もまた本質の中へ入り込み帰属している．」[53]

ここでは，Kraftと「時間」が必ずしも同一と見なされておらず，Kraftの本質の中に時間性が属していると考えられている．このようにニーチェがKraftと「時間」との本質的関係を洞察することが出来たのも，そもそも，「時間」が「動く」影であるからである．すなわち，*名詞*の言象領域で言葉が「言おう」とすることが，まだ，そうとは言えない場合，「言葉が言おう」とすることは，Kraftと見え，そして，それの本質の中に「動く」影としての「時間」が時間性として属すことになるのである．

このように，Kraftと「時間」の関係についてのニーチェの発言は、上記のような言象学的文法論的な解明によって導かれた内容と完全に合致している．

このことから一層明確になるのは，序論で示したように，ニーチェの「力への意志」は，まだ，*文法*的なことがらに至っていないというこの一点である．それはなるほど「主語-述語関係」という最古の信仰の束縛から脱出せんとしているのではあるが，まだ*文法*的な*動詞*それ自身には至っていないのである．この位置取りのゆえに，「*名詞*の言象領域で言葉が言おう」ということがそれ自身としては認識されず，その代わりに，Kraftの量の不変と，それが時間性を本質としていることが眺められ，そこから，「永遠回帰」が必然となるのである．Kraftは時間的であり，永遠に「変化流動」しながら，全体の量は一定のため，「永遠回帰」することになるのである．

結　　語

ニーチェの自然科学論の本質的途上性（序論への回帰）

上で示されたように，言象学的文法論的には，いわゆる物理学的自然界の真相に精通することは，空間と時間，そして，「動く」の三者に精通することである．すでにこのことは，アリストテレスによって知られていた．彼は，『自然学』の第３巻第４章の冒頭で次のように語っている．

「ところで，プュシス（自然）についての精通は，大きさとキネーシスと時間についての精通であるのだから，」

<ἐπεὶ δ′ ἐστὶν ἡ περὶ φύσεως ἐπιστήμη περὶ μεγέθη καὶ κίνησιν καὶ χρόνον>[54]

ここで「大きさ」とは*動詞*の最「外」界のその「外」を指している．つまり，この「外」とは，我々がそれをそのようなこととしては命名していないところのこと，空間である．アリストテレスは，自然の真相に精通することをこの三者に精通することであるとすでに知っていたのであり，まことに，このことは，驚嘆すべきことである．キネーシスとは「動く」ことである．

この三者は，これまで論じられたように，一つの*文法*的ことがら，すなわち，*動詞*の最「外」界，*名詞*の言象領域内の実状に他ならない．*動詞*の最「外」界における「外」そのものが「大きさ」として研究対象になる．また，その「外」が*動詞*の最「外」界であり，*動詞*との関係における「外」であることを明かさざるを得ない．「外」が「*動詞*（*Zeit-wort*）の」ということを最初に明かすと，「時間」が現れるのである．また，*動詞*は「する」ということの始原であり，それの原初定義である．ゆえに，「外」が「*動詞*の」を明かすことは，「外」で「する」が兆すことである．「外」で*動詞*が原初的にしていることが影像として映されるのである．それが「動く」ということである．こうして，*動詞*の最「外」界の*文法*的なことがらが，かの三者によって示されることになる．

逆に言うなら，アリストテレスがこの三者の精通が自然の精通であると言ったということは，少なくとも，彼が，*動詞*の最「外」界に眼差しを向けていたということを意味するであろう．もちろん，彼は，*文法*的なことがらをそれとして見ていたのではないが，しかし，本来的に自然であるところのことがらへ眼差しを向けていたということは言えると思われる．

アリストテレスの『自然学<φυσικὴ ἀκρόασις>』をハイデガーは「自然に関して傾聴すること」[55]と見なしている．自然について学生にアリストテレスが講義しているというよりは，自然に関して或る聞こえて来るものがあることを言っていると見たのである．事実，自然の奥深くには*動詞*の最「外」界，*名詞*という*文法*的なことがらが存しているのであり，それは，「見える」ことではなく，まさに「聞こえて来る」ことなのである．*動詞*の最「外」界に眼差しを向けるとは，そこで語られている或る*文法*事項に傾聴するということを意味するのである．

*動詞*の最「外」界という*文法*的ことがらへ傾聴することがアリストテレスによって為されているとしたとき，そこまで至っていない立場からは，一体，それはどのように見えるのであろうか．

最初に，まず，*動詞*の最「外」界のその「外」そのものは，単に空間と名付けられないことは明白である．ゆえに，すでに考察されたあのニーチェの「絶対空間」が再度見直されなければならない．ニーチェは，絶対空間の存在を信じると言い，それは，Kraftの基体としてのものであったのである．

ニーチェの立場においては，「動く」ということは，「力への意志」量ないしは「変化流動」を本質とするKraftとして理解されて

いる．これにともなって，*動詞*の最「外」界のその「外」は，Kraftを「限界付けるもの」と見なされる．「外」で「言おう」ということは「動く」ことに成るのに対して，「絶対空間」では，「言おう」は，限界付けられた量的な「力への意志」となるのである．

同様に，「時間」は，*動詞*の最「外」界が*動詞*の「外」であることを明かすことである．ところが，このような*文法*論的な視界が獲得されていない立場においては，すなわち，「私は絶対空間の存在を信ずる」と言われているような境位においては，「時間」は，絶対空間に限界付けられたKraftの本質に入り込み属するものと考えられるようになる．

つまり，空間の真相を明かす時間は，Kraftの本質の中に入り込んできたのであり，時間としての*文法*的規定はそれとしては明かされず，Kraftの本質に属するようなものになっているのである．しかし，このことと，「私は絶対空間を信ずる」という言い方で示されている空間規定はよく符合するのである．ここでは，一見すると，時間の本質規定が出来ていないように見える．しかし，事実は逆であり，これこそ真実の時間規定なのである．時間性がKraftの本質規定に入り込んできてそれに属するようになっているということ，それこそ，時間が言象学的文法論的に，*動詞*の最「外」界における「*動詞*の」であることを，しかし，そこにはまだ至れない視点からそれが見られていることを，表しているのである．ここでヘーゲルの時間規定との対比が鮮明になる．ヘーゲルの時間規定は，一見すると言象学的文法論的規定と合致しているように見える．しかし，そこには類似性が確かに存するが，見られていることがらは異なるのである．しかし，一見すると類似性のないニーチェの時間規定は，むしろ，言象学的文法論的な時間規定に近づいているのである．

ヘーゲルの空間と時間規定がいわば古典論的本質規定とすれば，ニーチェのそれは量子論的本質規定になっている．空間と時間，そして，Kraftという三者の関係は，本来的には*動詞*の「外」ということがらであるが，それをまだ*文法*的視界の中で見るのではなく，まだそこに至れない立場で見ると，上で述べられたようなニーチェ的規定性をもつのである．この規定こそ，もし，Kraftという概念を保つ限りでは，もっとも厳密な自然の本質規定になっているのである．

アリストテレスが言うように，自然に関する精通は「大きさ」と「時間」と「運動」の三者についての精通でなければならない．このような精通をニーチェは言象学的文法論的な途上における或る視点から為したと言える．

ニーチェの自然科学論が物理学の量子論と歴史的に重なるのは，このようにして，或る必然性によると考えるべきである．両者とも*動詞*の最「外」界ないしは*名詞*の言象ということへ向けて途上にあるのである．自然とは*名詞*の言象であり，*動詞*の最「外」界であるという言象学的文法論的規定に向けて歴史は動いて行くのである．

かくして，ニーチェの自然科学論は，*名詞*の言象学への途上にあり，したがって，それへの登頂のための，ベースキャンプのようなものとなり得るのである．

最後に，ニーチェの言う「力への意志」量が，物理学的には，量子論の複素数量Q（量子論的波動関数）であるとした本論文の主張に対して，様々な批判や意見があると思われるが，ここで筆者がそう見た根拠となる論究を正しく理解した上で批判等をして欲しいと願う．この条件下における批判や意見を筆者はむしろ歓迎したい．

注

1）清水茂雄：言象学的文法論における動詞とト・アウト<τὸ αὐτό>．飯田女子短期大学紀要，**35**，1-25，2018.

2）清水茂雄：言象学的文法論．飯田女子短期大学紀要，**28**，1-16，2011.
清水茂雄：言象学的文法論における動詞とエネルゲイア. 飯田女子短期大学紀要，**33**，126-130，2016.
さらに，第29集以降に公表された筆者の他の論文も参考にして欲しい.
また，間接伝達論的論理学の立場から考察された量子力学については，次の論文も参考にして欲しい.
清水茂雄：間接伝達論的論理学　第２部・注釈部（その11）．飯田女子短期大学紀要，**27**，16-27，2010.

3）前掲論文『言象学的文法論における動詞とエネルゲイア』のpp.132-133を参照.

4）清水茂雄：生成について．飯田女子短期大学紀要，**29**，75-101，2012.

5）Nietzsche：*Der Wille zur Macht*, Kröner, Stuttgart, 1964, S. 468（693）.
以降，この版で引用する時は，Nietzsche：Der Wille zur Machtと略記し，次に，ページ数（節番号）を添えて表す.

6）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 365（531）
なお，以下にニーチェから引用される三か所の文章は，この531の内容であるため，典拠を示さないことにする.

7）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 4（Vorrede4）.

8）KSA，Bd13，25［5］，Dezember1888-Anfang Januar1889.
ニーチェからの引用は，本論文においては基本的に注の５）で示したように，Kröner版を用いるが，そこに収められていない箴言については，以下の版（KSAと略記）から引用する.
Sämtliche Werke，Kritische Studienausgabe，HRSG: von G. Colli und M. Montinari，München，Berlin/New York，1980.

9）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 429（635）.

10）KSA，Bd. 6.

11）清水茂雄：「間接伝達論的論理学」の「門外領域」のための序説．哲学論集，**55**，15-32, 2008. に詳しいので参照されたい.

12）KSA，Bd13，25［6］，Dezember1888-Anfang Januar1889.

13）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 697（1067）.

14）間接伝達とは「秘密を秘密として伝達すること」ないしは「不伝すること」であり，ハイデガーの言うところの，<das sagende Nichsagen>とほとんど同一規定である．詳しく知りたい人は，次の論文を見て欲しい.
清水茂雄：間接伝達的真理についての諸研究（Ⅰ）．飯田女子短期大学紀要，**10**，1-25，1990.

15）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 369（543）.

16）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 370（544）.

17）KSA Bd13，11［415］.

18）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 374（551）.

19）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 418（617）.

20）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 419（617）.

21）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 370-371（545）.

22）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 427（634）.

23）*Physics*，201a11-12.
以下，アリストテレスの『自然学』からの引用は，慣用にしたがって記す.

24）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 421（619）.

25）KSA，12．25，Herbst1885-Herbst1887，1［59］.
26）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 421（619）.
27）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 378（552）.
28）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 386（567）.
29）1885年Herbst ～ 1887Herbst，1［28］
30）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 374（551）.
31）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 365（531）.
32）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 374（551）.
33）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 429（635）.
34）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 428（634）.
35）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 429（635）.
36）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 428（635）.
37）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 337（483）.
38）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 338（484）.
39）原田雅樹：「科学作品の現象学」の試み．哲学研究，584，42，2007.
40）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 428（634）.
41）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 428（634）.
42）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 428（635）.
43）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 427-428（634）.
44）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 427（634）.
45）Diels/Kranz：*Die Fragmente der Vorsokratiker*，Weidmann，1974，S. 162（54）.
46）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 425（629）.
47）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 427（634）.
48）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 431（639）.
49）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 693（1063）.
50）Hegel：*Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften*，Felix Meiner，Hamburg，1969，S. 206（§254）.
以下，この版で引用する場合，Hegel：Enzyklopädieと記し，節番号を付記する．
なお，ヘーゲル哲学の言象学的文法論的位置関係については，注の4に挙げられた論文を参照して欲しい．
51）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 370-371（545）.
52）*Timaeus*：37d.
53）Nietzsche：Der Wille zur Macht，S. 694（1064）.
54）*Physics*，202b30-31.
55）Heidegger：*Gesamtausgabe*，Bd. 9，Vittorio Klostermann，Frankfurt am Main，1976，S. 24.